

## 三谷恵子先生追悼シンポジウム（2023 年 6 月 18 日）報告記録

### はじめに

三谷恵子先生が思いがけずご逝去されてから早三年の月日が経ちました。新型コロナウイルス拡大の影響で、2020 年春以降、直接お目にかかる機会が少なかったのが悔やまれますが、三谷先生はそんな状況下でも、持ち前の積極性と研究への一途な思いから、授業はもちろん、研究会もリモートで継続する方法をエネルギーに模索し続けていらっしゃいました。なにかと機器操作に疎い文系研究者の我々を叱咤激励し、日本ロシア文学会の全国大会や日本スラヴ学研究会のシンポジウムを取り仕切り、いかなる状況においても研究は続くのであり、そのための相互協力がとても大切だということを身をもって示してくださいました。身体的にとってもつらい思いをされていたと推察しますが、最後まで研究活動をリードし、授業に専心されたことは、同僚にとっても学生たちにとっても、永く記憶にとどまることだと思います。

陳腐な表現ですが、先生はまさしくジャンヌ・ダルクやドラクロワの『民衆を導く自由の女神』のように、知的に豊かな未来へ向かって旗を掲げて疾走し、後に続く者たちに勇気を与えてくださる存在だったと思います。常にグローバルな広がりの中にいらして、個々の研究の営みが孤独なものであるにもかかわらず、それが全体のコンテクストに繋がるやいなや、思いがけない新しい世界が開かれる、そんな人文学研究の醍醐味を身をもって示してくださいました。

先生が亡くなられた直後にロシア軍によるウクライナへの軍事侵攻が始まり、イスラエルによるガザを徹底的に破壊する爆撃など、残念ながら言葉を失うような惨劇が続いています。先生ならこの事態に際してどんなことをおっしゃるだろうか... 答えが返ってこないのは知りつつも、思わず自問してしまいます。

亡くなられてから一年遅れで開催された追悼シンポジウムで発せられた様々な言葉の中にも、世界が激変し、極めて厳しい状況に置かれて思わず歩みを止めてしまいそうな私たちが、それでも前に進んでいくためのよりどころを先生の遺された言葉の中にどうにか見つけたい、という期待がこもっていたように思います。

追悼シンポジウムから少し時間が経ってしまいましたが、その思い出深い会の詳細をここに記録することで、これからも皆様と、多様性を互いに認めあい、共存する道を求めつつ、研究を共に進めていくための手がかりとなることを願ってやみません。

2025 年 3 月  
楯岡求美

日本ロシア文学会 日本スラヴ学研究会

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 スラヴ語スラヴ文学研究室 合同企画

## 三谷恵子先生追悼シンポジウム

### スラヴ人文学の今日と未来<sup>1</sup>

(2023 年 6 月 18 日、東京大学本郷キャンパス)

司会 楯岡求美

本日はお忙しい中、会場にもリモートでもたくさんの方にご参加いただき、ありがとうございます。これから三谷恵子先生の追悼シンポジウムを始めたいと思います。司会をさせていただきます東京大学人文社会系研究科文学部スラヴ語スラヴ文学研究室の楯岡と申します。よろしく願いいたします。皆さんご存知の通り、三谷先生が昨年 1 月に、本当に私たちにとっては思いがけず、突然この世を去られてしまい、その後ウクライナに対するロシア軍の侵攻であるとか、本当に世界がガラッと変わってしまうという経験をしてきました。1 年と少し経ってしまいましたが、改めて三谷先生に対して感謝と追悼の意を表したいと思い、日本ロシア文学会と日本スラヴ学研究会、そして東京大学スラヴ語スラヴ文学研究室の三者の合同シンポジウム企画を立ち上げた次第です。本日のプログラムにもありますように、三谷先生のご研究に関わりのある方々に、先生の研究の内容をご紹介いただき、皆様とその経験を分かち合う時間を取りたいと思います。

シンポジウムを計画する際、三谷先生の研究テーマを発展させる形で、何かしら新しい研究を提示するということも考えました。しかし、先生のフィールドがあまりに広すぎるため、横断的に全貌を理解するのは、いかに近い研究をしている私たちといえども、なかなか難しいであろうということに思い至りました。まずは三谷先生がどういうことを研究されていたのかを、私たち自身が知る機会として、このシンポジウムを計画いたしました。

本日は三谷先生のご遺族のお姉さま、岩本令子さんが来てくださっていますので、ご紹介いたします。ご参加くださりありがとうございます。後ほど中島先生や木村先生からお話があると思いますが、三谷先生が亡くなられてから、三谷先生の蔵書についていろいろとご尽力いただきました。

では、開会の辞ということで、日本ロシア文学会会長の中村唯史先生からご挨拶いただきます。

---

<sup>1</sup> 当日の報告に加筆している部分があります。また、報告者ごとに書式が異なるところがありますが、ご了承ください。

## 開会の辞

日本ロシア文学会会長 中村唯史

中村です。いま、楯岡先生からお話がありましたように、昨年1月に亡くなられた三谷恵子先生を偲んで、本日このシンポジウムを開催することになりました。本来でしたら昨年中に、あるいは遅くとも一周忌の頃には開きたいと考えていたのですが、昨年2月のロシア軍によるウクライナ侵攻とその後の事態のために、ここまで延期せざるを得ませんでした。つくづく戦争は人文学の敵であります。趣旨説明は楯岡先生がされましたので、私は少し個人的な思い出をお話しさせていただきます。

1991年でしたか、私はソ連留学中にクロアチアの研究者の方とたまたま同席する機会があったのですが、「自分は日本から来た院生です」と自己紹介したところ、いきなり「私たちのところに留学していたケイコ・ミタニを知っているか」と聞かれました。もちろん「知っています」と答えたところ、相手の方が「彼女は天才です」と言われたことを鮮明に覚えています。

1992年に帰国した時、三谷先生は東大スラヴ研究室の助手でいらしたのですが、あまり学術的なことと関係のないことを雑談するような雰囲気には見えなくて、私は最初のうち、ちょっと萎縮していました。ただ、研究のこと、あるいは事務的な厄介ごとをご相談すると、とても親身に対応してくださいましたし、その後も何かの機会にお会いするごとに、三谷先生のユーモアとかウィットとか、独特の捌けた感じに触れることも多くなって、次第にお話しするようになっていきました。

しかし、三谷先生のお人柄や考え方によく接するようになったのは、2015年に当時の望月哲男会長のもとで、日本ロシア文学会の執行部の仕事をご一緒するようになってからです。その2年後には会長になられ、2021年の10月まで足掛け6年間、執行部のお仕事をご一緒させていただきました。

三谷先生ご本人の口から体調が良くないということを伺ったのは、2021年の春だったと記憶しています。三谷先生は個人的なことはあまりお話にならない方でしたが、入院や療養に入る関係でロシア文学会の執行部には言うておく必要があると判断されたのだと思います。

その後もご病状について心配していましたが、三谷先生はその年の日本ロシア文学会で理事会・総会を統括されただけでなく、個人発表にもエントリーされて素晴らしい充実した報告をされました。12月には東欧文学の翻訳書を刊行されましたし、同じ月に日本スラヴ学研究会でもワークショップを取り仕切られたと伺っています。私自身も学会業務の引き継ぎなどで12月の中頃までメールのやり取りをしておりましたので、これは回復されてきているのかなと、そう思い始めた矢先の翌年1月にご訃報に接したのです。

2021年のお仕事ぶりを傍から見ていた者として、三谷先生は、ご自分の研究の集大成をめざしたというよりも、文献学であれ言語学であれ文学であれ、あるいは学会の業務であれ、学問

とその周辺という大きな流れの中で、最後の最後まで、さらに一步でも前に進まれようとしていたのではないかという印象を持っております。

本当に研究者として人間として生き抜かれたのだと思います。本日のこの会を、三谷先生を懐かしみ、偲ぶだけではなく、先生が多様な学問分野に残された足跡がどのようなものなのか、スラヴ人文学に関わっている私たちが先生亡き今、どのような地点に立っているのかを確認して、そこから今後いかなる方向へ踏み出すのかを考える機会とするのであれば、三谷先生はにっこり笑って「まあいいんじゃないの」と言ってくくださるような気がします。私自身、本日は発言者・登壇者の皆さんのお話を伺い、自分の今後の展望を考える足がかりとしたいと思っております。

本日はお集まりいただきどうもありがとうございます。主催者のひとりとしてご挨拶とさせていただきます。

## 司会

シンポジウムの開始にあたって、まずは中島由美先生と木村護郎クリストフ先生に三谷先生の蔵書についてお話いただきたいと思います。三谷先生は私たちが想像した通り、膨大な蔵書をお持ちでした。全てということにはなりません、なんらかの形で、貴重な書籍については東京大学のスラヴ研究室で「三谷恵子文庫」を作ろうと模索しています。それから、上智大学や京都大学、大阪大学をはじめとして他の大学にもご協力いただき、分散する形ではありますが、私たちの共有の財産として引き継いでいける形にすべく、現在作業している最中です。

実際に三谷先生のご自宅にあった蔵書を整理してくださった中島由美さんにお話いただきたいと思います。よろしく願いいたします。

## 報告 中島由美「蔵書から偲ぶ 三谷恵子が本と過ごした時間」

ご蔵書の整理をお手伝いした者として、「蔵書から見た三谷恵子」のようなお話をしようと思います。

私と恵子さんとは学んだ専攻が違い年代も違いますが、接点はまず共に旧ユーゴスラヴィア時代に留学を経験したというのがひとつ。もうひとつは国際スラヴィスト会議参加のための母体である日本スラヴィスト協会の運営に関わったことです。私が事務局だった時にいろいろ助けて頂き、やり残したことを彼女がすっかり片付けてくれて、それについては本当にありがたく申し訳なく思っています。研究だけでなく、事務能力も優れた方でしたね、本当に。

共に旧ユーゴスラヴィアに留学したといっても、私はセルビア語圏北部のノビサドにまず滞在し、それからベオグラードを経由してマケドニアへと南の方にどんどん行ってしまいました。恵子さんはまずクロアチアの首都ザグレブに行かれ、その後スロベニアへと、どちらかという



と北の方へ行ってしまいました。というわけで文化圏として南北棲み分けみたいな感じではありました。

初めてお目にかかったのは1980年秋、そのユーゴスラヴィア留学から帰ってすぐ栗原成郎先生の研究室に帰国の報告に伺ったところ、賢そうなスラッとした女子学生さんと勉強中で、「ちょうど良かった、大学院生の三谷さんです」と紹介されたのです。彼女もユーゴスラヴィアに興味を持っていて、留学を希望しているとのことでした。あー、栗原先生に立派な後継者ができたのかと、すごく嬉しかったことを覚えています。

国際スラヴィスト会議に関わるようになってからはご一緒する機会が増え、思い出がたくさんあります。これは2013年8月のミンスク大会の時、日本スラヴィスト協会会長の村田真一さんと3人で旧KGB前で撮った写真です。実はこの前日、ふたりとも無事発表が終わって散歩に出かけたのですが、革命広場の石畳のでこぼこではしゃいでいて私が転んでしまったのです。発表を終えたばかりで、パソコンやらなにやら重い荷物を背負ったまま全体重が小指1本にかかり、この小指が90度外に曲がってしまいました。三谷さんはその頃視力が少し弱くなっておられたとかで、「私転びやすいから何かのときは助けてね」と言われていたのに、粗忽者の私が転んでしまい三谷さんが荷物もってくれるやらホテルで交渉してくれるやら一緒に救急車に乗ってくれるやら、申し訳ないことになったのです。そんなこんなで、ミンスクで救急病院に行きました～！などと指を見せている一枚です。

さて、私が蔵書整理のお手伝いをするようになったのは、ひとつは退職するとき三谷さんに助けていただいたからです。本をどうしようか困っていたところ、「どんどん送っていいですよ、研究室の棚はまだ余裕あるから」と、快く受け入れてくださったのです。マケドニア語に関係する雑誌のバックナンバーや、ボーナス二回分はたいしたクロアチア語辞書などなど、良さげなものをどんどん入れたらみかん用段ボール40箱近くになりました。それをずっと申し訳なく思っていて、残された人がさぞ整理に困るだろうと責任を感じたのです。もうひとつは、私が歴代の先生方の蔵書片付けに関わったという歴史がありまして、経験もあるのでお役に立てるかも、と思ったのです。

歴代の先生方というのは、私が東京外国語大学で最初に言語学を習った徳永康元先生と千野栄一先生です。今日楯岡さんが皆さんに千野先生の書かれた大変面白いエッセーをプリントして配って下さったので、どうぞ後でお読みになってください。徳永先生のご自宅が本で溢れていた様子を面白おかしく書いておられますが、ご本人ものちに大変なことになるのです。

【これについてはエッセイのほうに書きましたので省きます】

本の整理のため三谷さんのご自宅に伺ったのは2022年4月3日、徳永先生、千野先生の頃を思い出しながら、まず全体の様子をざっと拝見、確かに大変な量であるとわかりました。書斎にしていたお部屋も寝室も、壁ぐるりの本棚はもちろん満杯で二重三重に本が並べられ、ダイ

ニング横の和室にも本の筧が積み上がっていました。でも少し詳しく見てみると、やっぱり三谷さんすごいなと思ったのは、分かりやすいんです、配置が。ものすごくいろんな分野の本があるので分類は大仕事ではあるけれども、なんとなく大丈夫そうな気がしました。

蔵書整理はまず分類から始まります。徳永先生のおときはお天気の日に庭にピクニック用シートをたくさん敷いてどんどん並べ、千野先生のおときはマンション一室を無理やり空けて分類スペースを作り、でしたが、三谷家ではとりあえず本棚の一部を空けることからはじめました。郵便局の仕分け棚ですね。はじめの頃は仕分けスペースも小さいので、見つけやすい語学書や辞書などから言語ごとに分けて置いていきました。ご自宅にはクロアチア語に関係するものが多く、レファランス資料が充実していました。辞書類は分けても分けても次から次へと出てくるので、棚はどんどん埋まっていきます。またソルブ語関連のものはあらゆる分野をカバーして他を圧倒、これについては木村さんが報告されますが、古い貴重なものも蒐集しておられ、ソルブ棚もあつという間に埋まってしまいました。

分類しながら仕分け棚を広げていってひと部屋目のめどがついたので、ふた部屋目には言語学関係、スラヴ文献学一般、教会に関係するもの、ヨーロッパの歴史、ユーゴスラヴィア史や紛争に関する図書、小説など文芸書、のように分けていきました。床の本の筧が片付き全容が把握できると、大学から持ってきた全集の一部などを研究室にまとめるなど細かいところにも目が届きます。文庫の類は「へえ、こんなの読んでたんだ」と興味深く拝見したり（恵子さん、ごめんなさい）、楽しみながら作業。図書以外にコピー類、紙資料の多さも半端なかったですが、海外の図書館でゲットした貴重なものなどを除き廃棄コーナーに仕分けてお姉さまがどんどん処分、という具合にリレー作業で片付け、夏ごろにはどこかの図書館？と思えるぐらいになりました。

分類があらかた終わりまして、必要な方に貰って頂きたいというご遺族の意向に従い、養子先の検討をはじめました。三谷さんにとってひとつひとつが大事な分野だったので、分野ごとに分散しないように、というのが皆さんの考えでしたが、三谷さんの人徳のなせる業か、ありがたいことにこちらも順調で、主な行き先が続々と決まりました。分類しきれなかったものや小さなグループのものなども、欲しそうな方にお声がけして貰って頂くなどし、おかげさまで2022年内にほぼ整理が完了したわけです。古本屋が機能し大学図書館も受け入れに好意的だった徳永・千野時代とは環境がすっかり変わっていたわけですが、それにもかかわらず順調に進み、ご協力くださった皆さまには本当に感謝しております。本人も喜んでいと思います。

ここで余談ですが、いろいろな作業の際には三谷さんがたくさん買ってあったポストイットが大活躍しました。こういう大きめサイズの買い置きが書斎に積んであったのです。例えば翻訳に使ったらしき本には、殆ど全ページに貼ってありまして、調べたこととかメモがびっしり書いてありました。ポストイットが欠かせない人だったみたいです。そこで私たちもこれを利

用させてもらい、本一冊ごとに通し番号をふって番号と一緒に本の表紙と奥付の写真をどんどん撮り、お弟子さんの大山さんが画像からリスト作ってくださって、こんなのあります！という具合に養子先を探したのでした。

三谷さんの蔵書のすごいところは、例えば教会スラヴ語の研究に必要な原テキストなどは当然として、レファレンスの揃え方が半端ない、ということです。キリスト教文献に取り組むからには、キリスト教のさまざまな側面を把握したい、歴史も把握しておきたい、そんなところでしょうか。各分野について同じことが徹底されているのがさらにすごいです。図書館を利用するといっても専門上日本国内ではどうにもなりませんし、海外でもあちこちを回らないとならないわけで、それを考えれば手元に揃えておく姿勢、投資をケチらない、そこです。最初にお話したようにクロアチアに留学されましたが、セルビア関係についても重要な資料が揃えてありました。旧ユーゴスラヴィア全体に関わる歴史図書もそうですね。百科事典のように場所を取るものも、各時代の版が揃えてありました。また、ソルブ語など少数言語に取り組むために、社会言語学や多文化社会論、EUの法体制に関する図書もありました。辞書でも、例えばチェコ語とセルビア語、ポーランド語とマケドニア語などのスラヴ語同士、あるいはクロアチア語とラテン語の辞書などは数バージョンありました（整理の際には悩みました、日本で三谷さん以外にこれを使う人がいるのだろうか？です）。

最後の最後に、私とお姉さまとでこれは何だったんだろう？というのが、アレキサンダー大王関連のものです。亡くなってからも注文してあった本が届きまして、研究のためだったのか、あるいは密かな楽しみのためだったのか、皆さんはたぶんこれからやろうと思っていた研究のためでしょ、とおっしゃると思いますが、最後の謎としておこうと思います。

私自身も経験することですが、個別言語の知識によって与えられる楽しみというのは格別だと思うのです。三谷さんはレファレンスも含めた、いわば言語の小宇宙の中にどっぷり浸って、それが快感だったに違いない、などと想像しています。そういうマイクロ宇宙をたくさん持っていたわけですね。あちらでも好きなだけ快感に浸っていただきたいと思います。

2008年8月マケドニアでのスラヴィスト会議で一緒にした時の写真です。この時とってもお元気で、よく飲みよく食べよく遊びました。いい思い出です。時間超過すみません、ありがとうございました。

## 司会

三谷先生は本当にすごく整然と片付けられて、常に毎月本をたくさん購入されていて、それをどういうふうに吸収していらっしゃるのか、すごく疑問でしたが、その話の一端を伺えてよかったです。続けて、木村先生お願いします。

## 報告 木村護郎 クリストフ「ソルブ関係の蔵書について」

さきほど、中島先生から三谷先生蔵書の全体像のご紹介がありました。これからその全体の中のほんの一部であるソルブ語関係のご紹介をさせていただきます。ほんの一部だけでもこれだけすごいということが見えると、全体は推して知るべし、ということで想像していただければと思っております。

私は学部時代にソルブ語に関心を持ちまして、三谷先生がちょうどスラヴ語学概論という授業をしていらっしゃったので、その授業に出たのが最初でした。それからドイツのソルブの地域でソルブ語夏期集中講座が2年に1回行われていて、そこで何回か一緒したことがあります。その後は日本スラヴ学研究会で一緒しておりました。

中島先生の方からソルブ関係の蔵書があるので見に来ないかと言われた時には、2、30冊程度あるのかなと思って軽い気持ちで見に行ったのです。そうしたら2、30冊じゃなくて2、30箱になるほどありました。桁違いで驚いたんですけれども、驚いたのはその量だけではなく、何よりもその質の高さです。その質を3つに分けてお話ししたいと思います。

まず1つ目が言語の幅広さです。ソルブについて書かれたものだけで、ソルブ語の他、ドイツ語、チェコ語、ポーランド語、クロアチア語、スロベニア語、ロシア語、英語、日本語で書かれたものを集めていらっしゃったんですね。先ほど中島先生から話もあったように、ソルブ語を周りからも広く見る視点が半端ではないというかすごいと思いました。

今日はその中ひとつだけ紹介したいんですけども、これは1951年刊のドイツ語の文献でネウストブニーというチェコの考古学者の本です。ソルブ地域の考古学の本まで集めていたことに驚くのですが、著者名のネウストブニーという名前でピンと来る方もいらっしゃるかもしれません。日本で大阪大学や千葉大学、桜美林大学などの教授をされたネウストブニー先生のお父様です。その方が考古学者でソルブ地域の研究されていたんですね。その方の書かれた本を三谷先生がお持ちだったということで、ソルブが日本ともつながる不思議な縁を感じます。

次に、年代の幅の広さです。これがまた半端でないのです。ソルブ地域にはソルブ研究所という組織が第二次世界大戦後にできまして、リエトピスというソルブ語研究雑誌を出しているのですが、その第1号、1952年のものから2000年代まで揃っています。

しかしそれだけではなく、マチツァ・セルプスカという、より古い歴史をもつソルブの学術団体の雑誌があるのですが、これが1848年の創刊号から揃ってるのです。つまり1848年のはじまりから現在まで、ソルブ地域におけるソルブ研究の流れが一通りわかる雑誌が揃っているということになります。

1848年の創刊号をみると、カトリックとプロテスタントの統一正書法の提案がされていて、これから標準的な書きことばを作るという気概が伝わってきます。それまでソルブ語ではカトリックとプロテスタントで様々な書き方があったのが、これから統一して同じものを使おうと

いう、まさに諸民族の春を感じさせます。この雑誌はナチスによって禁止される 1930 年代まで続くのですが、禁止される直前の 1934 年のものまでずっと所蔵されています。

さらに書籍は、ソルブ語の出版が禁止される 1937 年に至る戦前の本もあるので、ソルブ語の発展をこの三谷蔵書の中から追うことができるわけです。ソルブ研究所が出している研究書シリーズも 2000 年代まで揃えているので、三谷蔵書を見ると、ソルブ研究の現地での展開もわかります。

3 つ目が、分野の幅広さです。主に言語学かと思いきや、必ずしもそうでないのです。もちろん言語学は備えておくべきものは全て揃っていきます。例えばソルブ語地図があげられます。この地図は、ソルブ語の話されている村々のどの村ではどの単語が用いられ、どう発音するかということが細かくあげてられている 15 巻の方言地図です。また辞書はソルブ語関連のものは全てあるのではないかと思うほどです。さまざまな言語、また植物名の辞書など特定分野の辞書まで所蔵されていました。文法書も、研究書のみならず学校の教科書まであるのです。ソルブ語をどのように教えているかについては、1950 年代の学校の教員向けのマニュアルなど、私がある存在すら知らなかった資料もあって驚きました。

研究書は、歴史、教育、民俗学、文学などソルブに関する研究が存在する各分野の研究書が揃っていて、文学関係も多くありました。研究書以外でとりわけ充実しているのが文学者の全集です。主なソルブ語作家の文学全集が揃っているのです。絵本や児童書もいろいろあります。残念ながら日本ではまだソルブ文学の研究をする人がほとんどいないのですが、せっかくこれだけの資料があることで、ぜひソルブ文学の研究を始める方が出ることを願っています。

三谷先生と現地で一緒にいるとソルブ団体などに招かれて芳名帳に書くということがあったのですが、そういうとき、三谷先生は、ソルブ語の詩を書いて日本語訳をつけて 2 言語で残すという印象的なことをされていました。このような蔵書がそのタネ本だったのだらうと思います、先生が詩を選んでいる様子を想像します。

さまざまな分野のなかで私が特に目を大きく見開いたのが、民話伝説関係がいろいろあったということです。三谷先生が文学にも造詣が深いことは存じ上げていたのですが、民話や伝説に対してここまで関心が深いということは知らなかったのです。民話関係も、周囲を含めて考える姿勢がうかがえます。ソルブ地域だけでなく今のポーランドやロシア領になっている東プロイセンやバルト海地域あるいはチューリンゲンといった周辺の地域などの民話集が集められていました。これらは主にドイツ語文献です。三谷先生は現地で一緒にいた時もドイツ語で難なく用をこなされていましたし、ドイツ語も読まれていたということが、かなり多いドイツ語文献の存在にも表れていたと思います。

もう時間ですので終わりますが、おそらく三谷ソルブ文庫はヨーロッパ以外で最大だと思いますし、もしかするとソルブ地域とポーランドやチェコを除いて最大かもしれません。アジア

最大ということは間違いないでしょう。それが東京にあるのですから、日本のソルブ研究はぜひぶん恵まれた状況にあるわけです。東京大学等に所蔵されて後世に残されることは本当に素晴らしいことで、三谷先生にも改めて感謝したいと思います。

最後に、ここに持ってきた小さな冊子は、さきほど述べたソルブ語夏期講座で、夜の宴会などの折にみなで歌った歌集です。ソルブ独自の歌もあればドイツの歌もあり、ポーランドやチェコの歌も入っています。ソルブ文化は小さいだけに、周りとの関係が濃いことがわかります。このようにドイツ語圏にもスラヴ語圏にもつながっているのがソルブの一つの魅力だと思うのですが、非常に小さい言語ながらその深くて広い世界が、三谷先生のソルブ蔵書において、多言語及び時代の流れ、そして分野の幅の広さで余すことなく見事に反映されています。その意味で、蔵書の質が高いと申し上げた次第です。

三谷先生の関心の一部であるソルブでさえこれほどなので、他のスラヴ諸語や他の分野についてもこのような幅の広さと深さがあるということを想像すると、本当にすごい蔵書であるということが実感されます。

## 司会

ありがとうございました。本当に蔵書が多岐にわたっていて、私たちが整理をしていて、これは何だろうと頭を悩ませることが大変多くあります。

ひきつづき第一部のスラヴ諸語のセッションに移りたいと思います。堀口先生と菅井先生、壇上をお願いいたします。

今日の配布資料についてご説明します。会場の皆様にはワンセットでお配りしています。チラシの裏面に、簡単な三谷先生の研究業績と、今日登壇してくださる先生方のご紹介もついています。それから、笑顔の三谷先生の写真もあります。それから、資料の目次になっていますが、順番についていますので、お使いいただければと思います。配布資料の最後に三谷先生の業績の内、手に入りやすいものとして印刷されたものに限定して、博士論文は別ですが、著書と翻訳、それから論文のデータ情報を並べておきました。Zoomにご参加の方々にも随時レジュメの方は共有していきますので、よろしくお願いいたします。

では堀口先生お願いします。

## 第1部 スラヴ諸語

### 報告 堀口大樹「時間と空間を俯瞰する言語研究」

京都大学の堀口大樹です。ロシア語と、スラヴ語ではないですがラトビア語を研究しております。

三谷先生にお世話になった言語研究の方々は、この中にもたくさんいらっしゃると思います。その中でこうした機会をいただきありがとうございます。三谷先生の言語研究すべてを紹介することはできないぐらい、三谷先生は本当に広い分野を扱われていらっしゃいました。今日は三谷先生がどういうことを研究されていたか、また三谷先生のすごさについて、少しでも皆さんに知っていただけたらなと思っております。

三谷先生は大変幅広い領域を扱っていらっしゃいました。例えば、語の文法的意味を研究する形態論、語と語のつながりや構文といった統語論、そして言語自体だけではなく、言語を使う社会や人々、民族といった社会言語学的な研究もなされていました。南スラヴ諸語のほかにも、ソルブ語やルシン語といった少数言語や、その言語政策、言語アイデンティティも研究されていたいらっしゃいました。そして、我々が言語研究をしていて見落としがちだなと思うのが、研究史です。例えば今私たちは当たり前のように、「完了体・不完了体」と言っていますが、そうした文法用語はもともとあったわけではなく、言語研究の歴史の中で作られてきました。言語は歴史を通じて変化をしています、研究者の視点も変化します。それは、研究史を通じて見えてきます。

この報告の題目「時間と空間を俯瞰する言語研究」にもあるように、広く言語を見るというのが三谷先生らしさです。時間的な俯瞰については、言語の歴史、そして言語の中で今何が起こっているのかといった通時と共時の視点です。現代語の共時的研究をする際、「昔はこうだった」と通時的なことを不用意に出すのは論を展開する上で結構リスクがあり、混乱しがちです。でも三谷先生は言語史も研究されていたので、同じ論文の中に現代語の今と昔の話があっても、非常に整然と論を進められています。そしてもう一つの視点は空間的な俯瞰です。個別のスラヴ語はもちろん、様々なスラヴ諸語、近隣の非スラヴ諸語や一般言語学の視点もお持ちでした。ある言語の方言から広がって標準語、さらにはその周辺の地域の他の言語のことも扱っていらっしゃいました。このように、ミクロとマクロの視点を同時にお持ちでした。

言語研究は理論寄りか記述寄りになりがちですが、三谷先生は理論と記述のどちらの観点からも研究をされていました。理論的な研究では、一つの理論にこだわらず、様々なアプローチを柔軟に取り入れられていました。記述的な研究では、様々な時代の様々なジャンルの言語資料と向き合い、早い時代からソフトを用いて現在のコーパス言語学に相当するような数量的研究も行っていたいらっしゃいました。実際に現地に行ってフィールド調査なども行っていたいらっしゃいました。

私たちは現在日本語でスラヴ語学を論じることができています。それは先駆者の方々のおかげであり、三谷先生もその中のお一人です。三谷先生は一般向けの学習書や概説書の執筆をされ、日本におけるスラヴ諸語の普及や、スラヴ語学研究の発展に長年携われました。一般言語学やゲルマン語学など、スラヴ語学の外へもスラヴ諸語の研究成果を積極的に発信されていた

ことも、私たちが見習わなければならないことです。例えば、三谷先生の「ロシア語の『体』の研究史」<sup>2</sup>は大変な力作です。

ここで三谷先生の時間的俯瞰と空間的俯瞰の言語研究の好例の一つである論文を紹介します。2014 年の論文「動詞派生における *mimo* : スラヴ諸語の接頭辞付加と複合の区別の問題」<sup>3</sup>です。ロシア語で執筆された論文ですが、研究の背景を適宜解説しつつ、日本語で紹介します。

スラヴ諸語で *mimo* 「過ぎて」は副詞としても前置詞としても用いられます。一方、移動を表す動詞に付加されることもあります (*mimoiti* 「過ぎる」)。この論文は、*mimo* を接頭辞として扱うべきか (つまり *mimo* 動詞は接頭辞動詞か)、もしくは複合動詞の第一要素として扱うべきか (つまり *mimo* 動詞は複合動詞か) を問題とした研究です。接頭辞は歴史的に前置詞を起源としていることが多いですが、独立した語としては機能できません。限りなく接頭辞的に、語の前に付加されても厳密に接頭辞と認めることは簡単ではありません。

ここで補足解説をします。スラヴ諸語では接辞 (接頭辞と接尾辞) 付加は生産的であり、新しい動詞が派生していきます。一方で、複合 (独立した語や語の語幹) は、動詞の派生方法としては非生産的であり、複合動詞は非常に限られています (ロシア語: *злоупотреблять* 「悪用する」、*взаимодействовать* 「相互作用する」; ポーランド語: *błogosławić* 「祝福する」、*samoizolować się* 「自己隔離する」)。複合は動詞の派生よりも名詞の派生においてよく用いられる派生方法です (ロシア語: *рыбообработка* 「魚肉加工」、*взаимопонимание* 「相互理解」)。複合名詞はあっても *\*рыбообработать* 「魚肉加工する」や *\*взаимопонимать* 「相互理解する」のように複合動詞は通常派生できません。

再び論文に戻ると、古代スラヴ語では *mimoiti* 「通り過ぎる」や *mimonesti* 「運んで通り過ぎる」のように基動詞は移動を示す動詞です。なお、*mimo* 動詞はギリシャ語からの翻訳借用とされます。中世から現代スラヴ諸語に目を向けると、11 世紀から 17 世紀のロシア語の文献では、*mimo*-動詞、分かち書きされた *mimo*+動詞、動詞+*mimo* のいずれも見受けられるとのこと。現代のスラヴ諸語の辞書では *mimo*-動詞の登録は数件のみです。*mimo* 動詞の使用は、セルビア・クロアチア語の *mimoći(se)/mimoilaziti(se)* 「通り過ぎる」を除き、コーパスでは確認されません。コーパスで確認されるのは、チェコ語の *mimojdoucí* 「通りすがりの」「通行人」のように、名詞化・形容詞化した分詞として残るのみです。*mimo* が生産性を獲得しなかった理由の一つとして、同じく「過ぎて」を意味する接頭辞 *pro-* が生産性を獲得したことが理由と推定されます。形態的生产性、形態的切れ目と統語的分解度 (言い換えができるか)、意味的变化、結合価 (目的語や修飾語などとの結びつき) の 4 つの観点から分析すると、*mimo* は、副詞としての複合動

<sup>2</sup> つくば言語文化フォーラム編『「た」の言語学』ひつじ書房、2001 年、1-60 頁。

<sup>3</sup> 原題 *Мимо в глагольном образовании: Проблема разграничения префиксации и сложения в славянских языках*. 『ロシア語研究』24 号、2014 年、39-53 頁。



詞の第一要素と接頭辞の中間的存在であることが結論付けられます。

この三谷先生の論文から示唆される今後の研究の可能性として3点挙げたいと思います。

1点目は *mimo* 動詞に相関する名詞や形容詞化した分詞の研究です。*mimo* 動詞は分詞が形容詞化された形でスラヴ諸語に存在しているもの、不定形、人称形、時制形などの動詞として用いられている例はほぼありません。一方で *mimo* 動詞と相関する *mimo* 名詞が様態を示す造格を通じて副詞化した語として存在している例があります。例えば「通りすがりに、ついでに」を示すロシア語とブルガリア語の *мимоходом*、チェコ語やポーランド語の *mimochodem* です。その他、ロシア語の *мимоездом* 「(乗り物で) 通りすがりに」、ポーランド語の *mimojazdem* 「同上(旧)」のように移動の様態が異なる語や、移動の様態が比喩化したロシア語の *мимолётом* 「瞬く間に」も存在します。これらの語は男性名詞の造格が独立した語となって語彙化した例であり、辞書では見出し語(主格)としての *mimo* 名詞は掲載されず、そもそも使用されません。ロシア語の *мимолётный* 「一瞬の」、ポーランド語の *mimolotny* 「同上」のようにこれらと相関する形容詞も存在します。論文では *mimo* 動詞に相関する名詞や形容詞は扱われていませんでしたが、「過ぎて」の意味を持つ *mimo* 名詞や形容詞のスラヴ諸語内の比較も本研究に関連付けられるのではないのでしょうか。

2点目は、この論文から示唆される共時的な研究への視座で、現代スラヴ諸語における複合語の研究です。言語により発音や綴りに違いはあるものの、*eks-*「元」、*euro-/evro-*「ヨーロッパ・ユーロの」、*info-*「情報」など外来の要素は名詞と形容詞の複合語の第一要素として用いられ、名詞の語幹と接頭辞の中間的な存在として準接頭辞(prefixoid)とも呼ばれることがあります。複合動詞の派生に関しては、例えばロシア語の *саморазрушиться* 「自己破滅する」のように *сам(o)-*「自己」が条件付きではあるものも用いられます。一方、能動現在分詞が形容詞化した *самозаписывающий* 「自動録音する」のように、人称形や時制形、不定形ではなく、分詞形としてしか用いられない点は *mimo* 動詞の分詞を通じた形容詞化と共通しており、スラヴ諸語では複合動詞の使用が難しいことを改めて示しています。これらの名詞や複合動詞の分詞で用いられる要素は *mimo* とは異なって生産性があり、用例が豊富なため、共時的な記述や対照研究がしやすいでしょう。

3点目の視座は、派生における翻訳借用の役割です。*mimo*-動詞がギリシャ語からの翻訳借用であるという先行研究の指摘があったように、語形成において他言語からの翻訳借用の役割は無視できません。*mimo* に関しては、ポーランド語の *mimochodem* などの *mimo* 名詞は18世紀のウクライナ語からの翻訳借用(*rutenizm*)とされています。*сам(o)*-動詞に関しては、今日のグローバル言語である英語自体が、1970年代以降 *self*-動詞を増加させているという研究もあります。このことから英語からの翻訳借用によるスラヴ諸語の *сам(o)*-動詞の派生についても注視していくべきでしょう。

私の報告は以上です。ありがとうございました。

## 司会

ありがとうございました。Zoom のチャットには日本ロシア文学会学会誌の情報ではなく、学術情報サイトのアカデミアの方のリンクを貼りました。ダウンロードして読むことができますので、ご関心のある方はぜひ見ていただければと思います。

## 報告 菅井健太「南スラヴ語チャ方言をめぐって～三谷先生の南スラヴ語のお仕事を中心に～」

北海道大学文学研究院の菅井と申します。本日はこのような機会をいただきまして誠にありがとうございます。私は「南スラヴ語チャ方言をめぐって～三谷先生の南スラヴ語のお仕事を中心に～」というタイトルで先生のお仕事を見ていきたいと思います。本報告の構成はだいたい4部構成ですが、メインとなるのは第2部「南スラヴ語の共時的・通時的研究」と第3部「南スラヴ少数言語研究」で、それぞれ三谷先生の書かれた論文を簡単に紐解いていきたいと思います。

まず、先ほど堀口先生がおっしゃったこととも重なる部分がありますが、三谷先生はスラヴ語全てに広く精通し、おおよそほとんどのスラヴ語を研究対象とされていました。それによって、スラヴ語全体を見渡しながら、時には隣接する諸言語も含めた巨視的な視点から研究に取り組んでおられたということを、今回改めて先生の業績を拝見して感じました。また、こちらも堀口先生がおっしゃっていましたが、非常に特徴的なのが共時的視点と通時的視点を組み合わせた研究というのを進められていたことかと思います。当然、どちらの視点も、スラヴ語を総体的に理解する上では欠かすことができません。その両方を常に意識して研究することは本当に大変なことです。一般向けに出版された『スラヴ語入門』（三省堂、2011年）や『比較で読み解くスラヴ語のしくみ』（白水社、2016年）は、スラヴ語を総体的によく理解し、深い知識がある三谷先生だからこそ書くことができた本であると思います。

三谷先生はスラヴ語の中でも、クロアチア留学を経たということもあって、クロアチア語を中心とする南スラヴ語というのを研究の一つの主要な領域とされていたと思います。ですので、本報告では特に南スラヴ語に関する研究成果に焦点を当ててお話ししたいと思います。もちろん、クロアチア語に関することでも一般向けの書籍を出されていますが、今回は学術的な成果の一例ということで研究論文を取り上げたいと思います。南スラヴ語は、南東と南西で大きく分けることができますが、この中でも、南西の方はシト方言、カイ方言、チャ方言という方言の分類があります。これは「何」に相当する疑問詞がシト(što)なのか、カイ(kaj)なのか、チャ(ča)なのかによるものです。今回取り上げる論文で、先生が特に対象とされたのは南スラヴ語のチ

ャ方言です。チャ方言は、アドリア海沿岸部ダルマチア地方で主に話されている方言になります。

まず最初に取り上げる論文は、「完了形と過去時制—古チャ方言テキストの用法に見る南スラヴ語の動詞体系の変化」<sup>4</sup> というものです。

元来、スラヴ語では、動詞の形式の上で単純過去形と完了形が対立していました。単純過去形は語尾によって変化させる過去形である一方、完了形というのはL分詞と助動詞を組み合わせで作るものです。例えばスロヴェニア語、チェコ語、ロシア語などのような言語においては、完了形の方が過去を表す形として一般化されてしまっています。その一方で例えば標準英語のように単純過去形と完了形が区別される言語も南スラヴ語方言の中にはあります。この論文の目的はチャ方言の完了形と単純過去形の競合関係を通時的に探るということ、それから完了形が過去時制の一般的な形式になる段階へ変化する傾向の中でチャ方言はどう位置付けられるのか、ということを考えています。

表1 完了形と単純過去形の競合関係 (三谷 2003: 59)

段階	過去	完了 (結果、関与性)	言語の例
I	単純過去形	完了形	標準英語
II	単純過去形／ 完了形	完了形	標準ドイツ語 上ソルブ語
III	(単純過去形) 完了形	完了形	セルビア／クロアチア ／ボスニア標準語 現代フランス語
IV	完了形	完了形	スロヴェニア語 チェコ語、ロシア語

まず、現代チャ方言の場合、大部分で単純過去形は廃れ、完了形が過去を表す唯一の形式となりました。ただし、Susak 島方言など、単純過去形を保持している方言もあるということで、三谷先生は現代チャ方言について、単純過去形に対して完了形が優勢になる第 III 段階から第 IV 段階に位置づけられました。一方、古チャ方言文章語 (13 世紀半ば～16 世紀の初頭の世俗テキストに基づく) は、綿密な分析をされた結果、完了形は完了本来の意味を表すことも、単純過去形に代わるものとして用いられることもある、つまりこの 2 つの形が過去の事態を表す

<sup>4</sup> 『Dynamis: ことばと文化』 Vol. 7, 2003, pp. 57-75.

うえで競合関係にあることを明らかにされました。ただし、語りの部分においては単純過去形が、直接対話では完了形が、それぞれ数量的に優勢であることを明らかにされています。このことから三谷先生は、当時の話し言葉では、完了形が過去時制の形式として優勢だったと結論づけられています。このことを踏まえ、第Ⅰ段階～第Ⅱ段階にあったことを示されました。

さらに、これがスラヴ語の世界においてどのように位置づけられるかについても最後に考察されています。南スラヴ世界を俯瞰してみると、単純過去形が衰退し、完了形がその機能を担うという状況は北において進んでいます。南においては単純過去形が維持されており、いわば連続体的なものが見出せます。具体的に言うと、スロベニア語やカイ方言では、単純過去形というものが失われて、完了形がもっぱら使われるのに対して、南の端のブルガリア語やマケドニア語ではこの形式の対立はしっかり残しています。このような状況を踏まえ、古チャ方言文章語では「完了形が過去時制への機能拡張を進行させる過程の変化の様相をとどめている」（三谷 2003: 72）と指摘されています。

表2 南スラヴ語（および他のスラヴ語）の完了形の段階（三谷 2003: 72）

段 階	言 語 の 例
I	（ブルガリア・マケドニア語）
I～II	<u>古チャ方言文章語</u>
II	（上ソルブ語）
III	現代クロアチア標準語
III～IV	チャ方言
IV	カイ方言、スロヴェニア語

この論文は後に内容を発展させて国際スラヴィスト会議においても発表されていることから、先生の中で重要な研究として位置付けられていたということがわかります。なお、研究の意義について考えてみますと、南スラヴ語の一方言であるチャ方言の綿密な共時的・通時的な記述を行ったという点で、スラヴ語の記述研究の補完という意味合いが当然あります。また、チャ方言の特定の現象の究明を通じて、スラヴ語内での相対的な位置づけも可能とし、単なる南スラヴ語の一方言であるチャ方言の研究にとどまらせることなく、スラヴ語研究全体に貢献されました。通時的にも、古チャ方言で書かれた中世テキストも分析することで、対象とする特定の現象の通時的な発展の解明ばかりか、その具体事例を提示することを通じて、言語変化に関わる研究一般にも貢献されたと言えると思います。

三谷先生は本国のチャ方言だけではなくて、チャ方言を基盤とした在外方言にも目を向けられています。具体的に挙げますと、ブルゲンラント・クロアチア語や南モラヴィアのクロアチア語です。チャ方言の話者が16世紀にドイツ語圏あるいはチェコ語圏に移って、そこで話されていた言語です。これらはスラヴ語の歴史的変化を考察する際の興味深い手がかりを与えてくれます。また、本国と隔絶され周辺言語との接触を通じて独自の発展を遂げている言語ということで、言語接触論の観点からの分析ができるでしょうし、少数言語として移住先の社会における言語文化の保持が問題になりますから、この点で社会言語学的な視点が新たに導入されることになります。

まずブルゲンラント・クロアチア語についてですが、2001年の統計によれば、ウィーン南東のブルゲンラント州に16,334人の話者がいます。ブルゲンラント・クロアチア語は、チャ方言の特徴を最もよく示すと言われています。なお、このブルゲンラント・クロアチア語に特徴的なのは標準語があるということです。それは学校教育やメディアなどで使われている共通語であり、さらにはブルゲンラント州などでは公用語にもされています。この研究成果の一例として「南スラヴ語の指示代名詞とブルゲンラント・クロアチア語について」<sup>5</sup>がありますが、時間がないので飛ばします。

さて最後に扱いたいのが、南モラヴィアのクロアチア語です。これはチェコ共和国の南モラヴィア県に存在したクロアチア人村で話されていた言語です。先ほどのブルゲンラント州よりさらに北の方に移住した人たちということになります。16世紀に移住していますが、19世紀初頭には、フリーリストフ、ドブロポリェ、ノヴァブレラヴァの3つの村しか残っていなかったということです。さらに1948年にクロアチア人たちは共産党政権によって強制移住の処分が下され、南モラヴィアのクロアチア語は次世代に継承されることはありませんでした。なお、ここでモラヴィア・クロアチア語と呼称するこの言語は、チャ方言を基盤としています。この言語の研究成果の一例として「南モラヴィアのクロアチア語—言語の維持と社会的背景に関する一考察」<sup>6</sup>という論文を最後に見ていきたいと思います。共同体における言語の維持と変化のあり方、及びそこに関わる社会的要因を考察するものです。

三谷先生は、まず記述的な視点からこの言語に取り組みられています。記述的な特徴の中でもまずはチャ方言としての特徴を見られています。先行研究に加え、独自でインフォーマント調査により収集した言語資料をもとにして分析をされているという点が特筆すべき点です。さらに、本国のシト方言やチャ方言、さらにはブルゲンラント・クロアチア語とも比較しながら、モラヴィア・クロアチア語の特徴を記述分析されています。モラヴィア・クロアチア語は、一般的にはチャ方言、特にブルゲンラント・クロアチア語に広く認められる特徴を共有していま

<sup>5</sup> 『Dynamis: ことばと文化』 Vol. 10, 2006, pp.90-126.

<sup>6</sup> 『スラヴ研究』 No.58, 2011, pp.61-90.

す。一方で、モラヴィア・クロアチア語に特有の現象もあり、それらについても言及されています。細かい例は、お手元の資料にあります。時間の関係上、ここでは深く追求しません。

次に、言語接触論の観点からの分析も行われています。ドイツ語圏あるいはチェコ語圏にあるわけですので、ドイツ語やチェコ語の影響というものに注目されています。言語接触によって、供給言語から受容言語へ何らかの要素の借用が生じますが、借用されるのは語だけではなく、音韻・文法構造、さらには文法的意味など、様々な部分に及びうることがこれまでの研究で知られています。言語接触論においてよく知られている Thomason & Kaufman の研究によれば<sup>7</sup>、接触の程度が軽度であれば、基礎語彙以外の語彙の借用が中心である（第Ⅰ段階「軽度の接触」）一方で、非常に強い文化的圧力あるいは接触が生じると言語の類型論的变化をもたらす構造的特徴の変化をも引き起こしうる（第Ⅴ段階「非常に強い文化的圧力」）ことが指摘されています。三谷先生は、Thomason & Kaufman による、借用される要素と接触の程度の相関を表すスケールを使って、モラヴィア・クロアチア語の分析をされています。まずドイツ語からの借用は、語彙領域が中心で、それも基礎語彙以外の語彙の借用が見られます。加えて、ドイツ語の接頭辞付き動詞に対して、副詞と動詞を組み合わせた句形式によって対応させる例が見られたり、敬称の三人称の用法が見られることなどから、語彙および若干の句レベルのパターンの借用にとどまる、つまり借用の程度は第Ⅰ段階「軽度の接触」であると論じられています。一方で、チェコ語の方は、こちらも語彙の借用は多いものの、ドイツ語と異なることとして、日常生活上の語彙、さらには接続詞や前置詞など、使用頻度の高い機能語すら借用されているほか、roz-, vi-といった派生形態素や、一人称複数形の語尾-me といった屈折形態素も借用されているということを指摘されています。借用が、日常的な語彙や機能語、派生形態素や屈折形態素にも部分的に及んでいることから、ドイツ語と比較すると接触の程度が一段上がって第Ⅱ段階「やや強度」から第Ⅲ段階「強度の接触」であると結論付けていらっしゃる。

次に、この言語が維持された社会的な背景についても分析されています。第一言語と第二言語が接触した時、第二言語の影響下において構造にある程度の変化が生じながらも第一言語が維持されることも、言語集団が第一言語から第二言語に乗り換えてしまうこともあります。多数派の言語、しかもそれが社会的に高い地位を持っている場合には、少数派の言語から多数派の言語へ取り替えが行われることは珍しくありません。モラヴィア・クロアチア語の場合、社会の威信言語はドイツ語やチェコ語です。実際、多くの移住クロアチア人がドイツ化あるいはチェコ化することで、祖先の言語を失っています。その一方で、南モラヴィアの3つの村では、強制移住が行われた1948年までは少なくとも言語が維持されていたというのもまた事実です。では、その背景に何があったのでしょうか。まず、言語が継承されていく中で一番重要な領域

---

<sup>7</sup> Thomason & Kaufman (1988) *Language Contact, Creolization, and Genetic Linguistics*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

というのは家庭です。異なる民族同士の結婚が行われた場合には、一般的にマジョリティの言語に移行してしまうのはよく知られていますが、移住先でもクロアチア人同士の結婚がかなり保たれたことで、家庭内の言語継承が実現しました。また、信仰生活においてもクロアチア語が使われ、教会を通じた人々の交流の中でもクロアチア語が使われていたことも言語維持に貢献したと考えられます。さらにもう一つ特徴的なのが、先ほど挙げたブルゲンラント・クロアチア人の社会との結びつきです。三谷先生は、これらの要因が言語維持に貢献したであろうことを指摘されています。このように、本研究では、言語記述とその社会背景の考察を組み合わせた言語研究の事例を提示されました。

ここから見える成果について考えてみますと、まず在外チャ方言などのスラヴ少数言語をテーマとし、自らも現地調査を行って収集した資料に基づく研究をされている点は特筆すべきです。日本の研究者からするとやはりヨーロッパは地理的な点でハンデがあると思います。それにもかかわらず、自らも現地に赴いてインフォーマントと接しながら資料を収集し、新規的なお仕事をされました。さらにこれも実は意外と大事なことだと思いますけれども、日本のスラヴ研究の学界において、私自身も含め、後進の研究者にスラヴ世界における少数言語研究の可能性を提示してくださったと感じています。

最後に受け止めと自身の研究の展望について述べます。私自身がこれまで取り組んできたことは、在外ブルガリア系住民の言語に関わる研究です。特に最初は言語接触論の観点から取り組んでいましたが、最近は社会言語学的な視点からも検討を行っています。今まではどちらかというとそれぞれ個別の村や集落における言語の研究に特化していて、他の方言やスラヴ語との比較の観点というのが欠けていました。また、在外方言の通時的な研究は少し難しい部分はあるのですが、今後はこの視点からも取り組まなければいけないということを強く感じています。そして、最後に見た論文で三谷先生が志向されていた記述言語学と社会言語学の融合的なアプローチを導入していくことも、私自身の研究をさらに発展させていくうえで重要であると考えています。あと、もう一つ大事なこととして、現地調査というのは継続していく必要があります。なぜならば、少数言語を取り巻く状況というのは常に変動し、少数言語やその話者は、その影響を強く受けるからです。この動的な少数言語の実態や仕組みの記述を継続していくことはとても大事だと思っています。

## 司会

菅井先生ありがとうございました。

## 第2部

### 司会

第2部は文献学ということで服部文昭先生と恩田義徳先生にご報告いただきますが、残念ながら服部先生が体調崩されてしまって安静が必要らしく、状況が難しいということと Zoom の参加も難しいということなのでここは療養に専念していただく形になりました。その代わり服部先生が動画でご報告の部分を送ってくださいましたので、今から画面共有してそちらの方を見ていただきたいと思います。資料はお配りしたものに詳しく載っていますので、ご参照ください。よろしくお願いします。

### 報告 服部文昭「三谷恵子先生の文献学を若い世代に引き継ぐために」

#### はじめに

#### 1 文献学とは

文献学とスラヴ学  
スラヴ学的发展  
スラヴ学の開祖  
なぜチェコから  
ロシアでは  
19世紀のスラヴ学  
ヴァトロスラフ・ヤギッチ  
スラヴ学を受け継いだ人々  
統合的な視野でスラヴ研究  
スラヴ学の具体例

#### 2 三谷先生のお仕事から

修士論文＝中世ロシアの重要文献であるДОМОСТРОЙを論じる  
参考：邦題『家庭訓』（佐藤純一先生の『ロシア語史入門』による概略）  
三谷先生のスラヴ文献学の出発点  
文献学的な研究も常に心掛ける  
お仕事の一例から  
お仕事の内容を理解するための予備知識  
スラヴ語訳ПАПのエディションの研究  
≪文集≫＝研究を進める際の重要な要素  
S 29 Савина 29 の重要性



文献学的な写本研究の実際

三谷文献学の好例

注目したいこと

その後の三谷文献学の展開を展望するヒント

その後のお仕事の一例：まず、これを読んでみて

### 3 締めくくりとして

若い皆さんが出来ること

研究の「とっかかり」を見つけるヒント

昨年1月に急逝された三谷恵子先生は多くの優れたお仕事を残されました。文献学の分野でも特筆すべきものが数多く有ります。今日は、これからの世代の皆さんに、三谷先生のお仕事を引き継いでいただくために、三谷文献学をご紹介できればと願っております。

まず始めに、文献学という分野の全般的なポイントを簡単に説明して、それと照らし合わせる形で、三谷先生のお仕事の優れた点や特色をお伝えしたいと思います。それによって、若い世代の方々の文献学へのモチベーションが高まればと考えています。いただいた持ち時間のかなりを文献学の紹介に当てますが、遠回りなようでも、それが、三谷先生のお仕事を知るための近道かと思いますので、どうか、お付き合い願います。

## 1 文献学とスラヴ学 (славистика)

1-1. 漠然とした意味では、古代の中国、インド、ギリシアやローマといった文字文化を持つ文化圏では「文献学」的な営みが行われていました。また、いわゆるキリスト教圏のヨーロッパでは、聖書の研究が、さらに、ルネサンス以降は、広く古典古代の研究が進められ、18世紀、19世紀あたりのドイツにおいて特に隆盛を見て、その学問が **Philologie** と呼ばれるようになりました。その特色は、「ある民族の残したあらゆる種類の文献を研究し、その民族の、特に古い時代の文化を知ろうとする学問。そのためには、言語学、考古学、歴史学、民族学、書誌学など、多くの関連諸学の助けが必要であり、さらに文献の種類からいっても、文学、宗教、哲学、法律、歴史をはじめとする多方面の莫大な知識を必要とする。こうしたものをすべて含んだ統一的文化学を文献学と」(『ブリタニカ国際大百科事典』) といったものでした。

1-2. スラヴ世界では、このドイツ風の文献学に近い概念として、

Славянская филология

славяноведение

славистика

のような術語が、ほぼ同義に使われていました。スラヴ文献学、日本語ではスラヴ学と呼んでも良いでしょう。このスラヴ学の開祖は、チェコの学者、ヨゼフ・ドブロフスキー（Josef Dobrovský 1753-1829）です。19 世紀初頭、スラヴ学は目覚ましい発達を始めました。ロシア以外のスラヴ民族は独立国ではありませんでしたが、スラヴ民族のそれぞれが学者を輩出し、彼らが、自らの言語、歴史、文学を丹念に研究し始めました。その先駆けとして 1 世紀末にドブロフスキーが登場したのです。チェコ語を話す地域は、当時、ハプスブルクのオーストリアに組み込まれ政治・経済や学問の分野でドイツ語使用を余儀なくされていたのですが、社会的に、他のスラヴ人地域より進んだ発展をしていて、かつ、古い歴史と優れた言語文化を誇っていて、この地域において、まず、民族的覚醒と文章語の復興の動きが始まったことは当然でした。その後、彼に続き、ハプスブルクのオーストリア領内から優れたスラヴ学の研究者が出ます。その当時、ロシア帝国は列強の一つでしたが、文化的に後れを取っていたことは否めませんでした。そのロシアでのスラヴ学を一人で牽引したのがヴォストコフ（Александр Христофорович Востоков 1781-1864）です。

1-3. スラヴ学の研究は、19 世紀を通じてプラハを始めベルリンやウィーンなどでも研究が進み、ロシアでは、モスクワ、ペテルブルク、カザンなどの大学で研究が進展します。その中で特筆すべきは、クロアチア人ヴァトロスラフ・ヤギッチ（1838-1923）の活躍です。ヤギッチは、19 世紀から 20 世紀へスラヴ学をつないだ重要な存在なのです。野町素己先生の追悼文に有った言葉ですが、「タイムマシンがあれば一番会ってみたいスラブ語学者は誰か、といった他愛もない話を三谷先生としたことがある。三谷先生は、満面の笑みを浮かべて、スラブ文献学の碩学ヴァトロスラフ・ヤギッチの名前を挙げ、その魅力を熱心に語られた。」とのことでした。

1-4. あのヤーコブソンは「言語学者」として知られますが、実は、スラヴ学の第一人者です。そして、日本でのスラヴ学の基礎を据えた木村彰先生もフルブライトで留学したハーバードでヤーコブソンの許で研究しました。その木村門下の佐藤純一、栗原成郎、千野栄一の先生方も「スラヴィスト」です。つまり、言語のみならず、文学なども含む統合的な視野でスラヴ研究を究められました。三谷先生も、その姿勢を立派に受け継いでいたのです。言語学のお仕事、翻訳などのお仕事も含めた三谷先生の研究の「本丸」はスラヴ学にあったのです。

1-5. スラヴ学の少し具体的な例を示しましょう。次の写真とそれに続く補足説明をご覧ください。

\*\*\*\*\*



『ゾグラフォス写本』(グラゴール文字、テトラ、11世紀初)

第13葉(裏)、第14葉: マタイ福音書7.24-27

(第13葉裏面の中ほどの朱の文字列から)

キリル文字での転写:

24. всѣкъ оубо іже слышитъ словеса моѣ си. і сътворитъ ѣ. оуподоблѣ и мжѣю мѣдроу. іжъ съзѣда  
храминѣ своѣхъ на камене.
25. і снѣидѣ дѣждѣ і придѣ рѣкѣ. і възвѣаша вѣтри. і нападѣ на храминѣ тѣ. і не паде сѣ.  
основана бо бѣ на камени.
26. і всѣкъ слышѣи словеса моѣ си. і не творѣ ихъ. оуподобитъ сѣ мжѣю боуо. іжъ съзѣда храминѣ  
своѣхъ на пѣсѣцѣхъ.
27. і снѣиде дѣждѣ і придѣ рѣкѣ. і възвѣаша вѣтри. і опрѣшѣ сѣ храминѣ тои. і паде сѣ. і бѣ  
раздроушение сѣхъ велие сѣло.

《参考》(グラゴール文字はキリル文字で転写)

1. 『マリア写本』(グラゴール文字、テトラ、11世紀初)

24. всѣкъ оубо іже слышитъ словеса моѣ си і творитъ ѣ. оуподоблѣ и мжѣхъ мѣдроу. иже созѣда  
храминѣ своѣхъ на камене.
25. і снѣиде дождѣ и придѣ рѣкѣ. и възвѣаша вѣтри. і нападѣ на храминѣ тѣ. и не паде сѣ  
основана бо бѣ на камене.

26. и всѣкъ слышши словеса моѣ си и не творихъ ихъ. оуподобитъ сѧ мѣжѣ боуж. іже созьда  
своѣ хранинѣ на пѣсѣцѣ.

27. і съниде дождь і приидѣ рѣкы и възвѣаша вѣтри и опърѣша сѧ хранинѣ тои. і паде сѧ. і бѣ  
разроушение еѧ велие сѣло.

2. 『アッセマーニ写本』(グラゴール文字、アブラコス、11世紀半ば)

24. всѣкъ іже слышит. словеса моѣ си. и творитъ ѣ. оуподоблѣ и мѣжю мѣдроу. іже създа  
хранинѣ своѣ на камене.

25. и съниде дѣждь и приидѣ рѣкы. и възвѣаша вѣтри. и нападѣ на хранинѣ тѣ. и не паде сѧ.  
основана бо бѣ на камене.

26. и всѣкъ іже слышитъ словеса моѣ си. и не творитъ ихъ. оуподоблѣ и мѣжю боую. іже създа  
хранинѣ своѣ на пѣсѣцѣ.

27. и сънидеждь и приидѣ рѣкы. и възвѣаша вѣтри. и опърѣша сѧ хранинѣ тои и паде сѧ. и бѣ  
разроушение еѧ велие сѣло.

3. 『サヴァの本』(キリル文字、アブラコス、11世紀半ば)

24. всакъ іже слышитъ ми словеса и творитъ я. оуподоблѣ его мѣжеви мѣдроу. іже створи храмъ  
своі на камене.

25. и съниде дѣждь и приидѣ рѣкы. и възвѣаша вѣтри. и потѣкѣ сѧ хранинѣ тоі. и не паде сѧ.  
основана бо бѣ на камене.

26. и всакъ слышѣ ми словеса си. и не творѣ ихъ. оуподобитъ сѧ мѣжеви боую. іже створи своѣ  
хранинѣ на пѣсѣцѣ.

27. и съниде дѣждь и приидѣ рѣкы. и възвѣаша вѣтри. и потѣкѣ сѧ хранинѣ тоі и паде. и бѣ  
разорение еі велие сѣло.

◆写本テキストを読む上での留意点◆

1. 活字印刷された現代の書物と異なり、写本は、基本的に「一点物」である。つづり字、語形、語彙、構文に至るまで、その写本を作成した写字生の産物。
2. (単純な書き誤りは別として) 写される元本を前にして、機械的に書き写す場合に加えて、写字生の判断で、つづり字、語形、語彙、構文などが選択される場合が少なくない。写字生の判断は、自身の教養(それまで読んだ他の諸写本の知識など)に限らず、自身のいわゆる母語の影響などの複合的な要因で決まる。
3. 同じ著作物の諸写本間の異読は、写される元本の違いに加えて、上記の写字生の判断によ

ることも多い。

4. 古代教会スラヴ語の現存する諸写本は、古い物でもメトディオス、コンスタンティノス兄弟のオリジナルから約百数十年も後の時代の写本である。従って、その間の時間的、空間的な問題点に注意が必要である。例えば、弱化母音 ѣ と ѣ について、体系的に正確につづった写本は一つも残されていない。この二つの母音は、西寄りの地域のスラヴ人、南寄りの地域のスラヴ人、東寄りの地域のスラヴ人のそれぞれで、10 世紀半ばから異なる変化を見せ始め、11 世紀にはその変化が広く拡大していた。現存諸写本が作成された時、各地域のスラヴ人写字生たちの日々の言葉では、元来の弱化母音 ѣ と ѣ は、もはや存在せず、従って、メトディオス、コンスタンティノス兄弟のオリジナルからの伝統的な正書法の記憶は辛うじて受け継がれたとはいえ、正しく使い分けることは出来なくなっていた。

\*\*\*\*\*

こういったことを踏まえて、スラヴ学者は、或る写本が、いつ、どこで、作成されたかを考察します。そして、写本の写真版、分かち書きにした活字版（グラゴール文字はキリル文字に転写するのが伝統だった）、語彙集の三点セットで出版することが理想だと言われています。

## 2 三谷先生のお仕事から

2-1. さて、三谷先生は、栗原先生の許でスラヴィストとしてのスタートを切ります。学部の卒業論文は現代ロシア語がテーマでしたが、修士論文では三谷さんは中世ロシアの重要文献である ДОМОСТРОЙ を（主旨は「ДОМОСТРОЙ の言語——コンシン所蔵写本による言語的特徴の研究より」として『ロシア語ロシア文学研究』（16）、1984 年で読むことができます）論じられました。

邦題『家庭訓』で知られる本書につき、佐藤純一先生の『ロシア語史入門』により概略を述べます。「15 世紀にノヴゴロドで作られた内外の著作からの処世訓の類の引用抜粋集が原本と推測され、16 世紀中頃、司祭シリヴェストルが再編集して、最後に自らの教訓を書き加えたもので、全 64 章からなる。三部構成で、第 1 部：正教徒として守るべき生活の諸徳目（1 章-15 章）、第 2 部：家庭の中心たる家長の責務（16 章-29 章）、第 3 部：家長と主婦が司る家政全般の心得（30 章-63 章）のようになっている、ДОМОСТРОЙ という題はシリヴェストルの命名だと言われる。

三つの系統で約 40 点の写本が伝わるが、最古の写本は、16 世紀中頃のシリヴェストル版のコンシン所蔵写本で、大多数の写本と後代の翻刻は、これによる。二つ目は「帝室ロシア歴史古文化協会本」と称される、いくつかの点で内容も順序も異なる 67 章からなる写本であるが、16 世紀 60 年代の写本の系列が有り、また、言語的にも古い要素を含み、シリヴェストル以前の失われてしまった原本を写した可能性も否定できない。第三の系統は、前二者を部分的に混

ぜ合わせたような、誤りも多い不完全な写本とされている。」

実は、当時、栗原先生の演習において、この作品を精読して、私も聴講していました。三谷先生は、このゼミに加えて、さらに「(女性ですが) マンツーマン」で栗原先生と共に研究を究めて、先のテーマのような論文に仕上げたのです。中島由美先生がその光景を見て「いつも栗原先生の研究室で先生と真剣に勉強している若い人は誰なの？」とおっしゃったことを、今でもよく覚えています。

この作品の研究に際しては、内容的にレジスターが異なる諸著作とシリヴェストル自身の言葉の特徴を「薄皮を一枚一枚はぐ(栗原先生の表現)」よう丹念に読み解かねばなりません。ここが、三谷先生のスラヴ文献学の出発点となったのでした。

2-2. 三谷先生は、その後、1993年6月、筑波大学文芸言語学系講師となります。この頃は、お勤め先のこともあったのか、理論研究的、対照言語学的、また類型論的なお仕事も増えてきましたが、文献学的な研究も常に心掛けられました。その成果は、1999年の京都大学への異動後に目覚ましく花開きます。あれこれの南スラヴの中世写本を題材に三谷先生らしいお仕事ぶりでした。

2-3. 根気よく研究に取り組まれるところも三谷先生の強みでした。お若い頃、『賢者アキールの物語』にとっても興味を惹かれるというお話を聞いていましたが、後に2014年、三谷先生はスラ研の競争的資金を得て、本格的な研究に取り組まれ出しました。このことを少し具体的に紹介したいと思います。

三谷恵子『『賢者アキールの物語』南スラヴ圏写本の比較研究』SLAVISTIKA 30号、2015年、83-99頁。

や、その英語版とも言える

Keiko Mitani. The Croatian Tradition of the Story of Akir the Wise in South Slavonic Recensions. SLOVO, sv. 67 (2017), 1–21. UDK 821.163-3“13/16“.09 75. 80.

といったお仕事が代表例(いずれもウェブからPDFで利用可能)ですが、その内容を理解するために、まず、予備知識の整理をします。

2-4. 『賢者アキールの物語』(ロシア語《Повесть об Акире Премудром》、以下ПАП)とは、中世ロシア以来、ロシアで広く知られた教訓説話です。ロシア文学史における『賢者アキールの物語』は、一言で言えば、紀元前7世紀のアッシリアの伝説に起源を持つ教訓的な説話であり、12世紀の初頭には中世ロシアの地で知られています。翻訳の原典はシリア語かギリシア語かアルメニア語か、定かではありません。ニネベの王セナケリプの顧問官アキールがエジプト王か

ら課せられた難題を解決する知恵と冒険が主題です<sup>8</sup>。

ПАПのスラヴ語訳が、いつ、どこで、どの言語の原典から翻訳されたのかは、今もって未決着のままです。ПАП『賢者アキールの物語』は、中世のロシア以外にブルガリア、セルビアなどの、スラヴ世界の中での東方教会文化圏において広く知られています。

ПАПのスラヴ語訳が、いつ、どこで、どの言語の原典から翻訳されたのかに関して、ロシアの研究者の多くは、11世紀か12世紀に中世ロシアの地で翻訳されたと考えます。中でも、グリゴリーエフ、メシチェルスキーらのシリア語版からの翻訳説が主流で、他方、少数派のアルメニア語版説、アラビア語版説などは別にしても、ギリシア語版説は完全には否定しきれないのです。ただし、原典とするに足るギリシア語版は、今のところ、知られていません。

一方で、ロシアと異なり、ブルガリアの研究者たちは、10世紀ないし11世紀に、ブルガリアで翻訳され、それが後にロシアやセルビアに伝播したと考えます。ギリシア語版が現伝しない以上、シリア語版を考えるのももっともだが、そのことは、必ずしもギリシア語版からのスラヴ語訳の可能性を排除するものではないとも考えています。

紀元前7世紀のアッシリアの伝説に起源を持つ、この教訓的な説話『賢者アキールの物語』ですが、その一部は、実は日本でも広く知られます。伝説や『枕草子』などで知られている「蟻通明神（ありとおしみょうじん）」の説話がそれです。

「唐の国から日本人の才を試そうと、幾重にも曲がった玉に緒を通すようにとの難題が出された時、老人の指図に従い、蟻に糸を結びつけて通し、解決した。」

といった内容ですが、昔話では「姥捨山（うばすてやま）」に含まれる一モチーフでも知られます。同じようなモチーフがスラヴ語訳の『賢者アキールの物語』でも、もちろん重要な要素として含まれているのです。

2-5. さて、スラヴ語訳 ПАП のエディションの研究はドゥルノヴォが着手し、トヴァローゴフが確立しました。ドゥルノヴォらは、写本群を第一世代から第四世代まで分類して、第一世代が基本形だとみなします。第二世代以降は構成が短縮・簡略化されます。とりわけ、第三世代からは、もはや筋立てしか保存せず、第一・第二世代とのテキスト的な一致も持ちません。そして、第四世代は、第三世代のフォークロア的な改作、あるいは、小説化されたものとして登場するのです。

ロシアの研究者たちは、第一世代（現伝する写本は15世紀からだ）の誕生を11世紀ないし12世紀のルーシにおいてと考えていて、そこから南スラヴの各地に広がったと主張します。他方、先にも述べたように、ブルガリアでは、異なる考え方を展開し、10世紀から11世紀にかけて、Цикъл апокрифи за Авраам と同時期にブルガリアでスラヴ語訳されたと言います（ヨノ

<sup>8</sup> 川端香男里（編）『ロシア文学史』東京大学出版会、1986年。

ヴァらの研究)。

ロシアの写本と南スラヴの写本から著名なものを挙げます(写本の詳細に関しては、クウジドヴァなどを見られたい)。

#### 第一世代

##### ① S 29

Савина 29 (в кодекс №29 от сбирката на манастира Савина/モンテネグロ)、1380 年ころ、37a—526 (Богдановић 1982: №345)。セルビア語。

##### ② B 828 (1941 年に焼失)

НБ—Белград 828 (Прибилов сборник)、1408—1409 年、53a—75a (Матић 1952: 135—140); Дурново 1915: 37—44。ブルガリア語。

##### ③ O 189

РГБ(ГБЛ), собр. ОИДР, №189、15 世紀末、Григорьев 1913: 1—235。ロシア語。

##### ④ V 427 (末尾を欠く)

ГИМ, собр. Вахрамеева, №427、15 世紀末～16 世紀初、Григорьев 1913: 1—235。ロシア語。

##### ⑤ Ch 254

ГИМ, Чертков, 254—Q、16 世紀(第3 四半期)、(Черниловская, Шульгина 1986: 63); Григорьев 1913: 236—264。セルビア語。

##### ⑥ B 309

НБКМ 309 (Беляковски сборник)、16 世紀後半、4a—266 (Цонев 1910: 254—257)、旧整理番号=Софийска библиотека №68 (Дурново)。ブルガリア語。

##### ⑦ P 101

НБ—Пловдив 101、16 世紀後半～17 世紀初頭、1566—1676 (Цонев 1920: 69—84); Григорьев. 1913: 236—264。ブルガリア語。

##### ⑧ Kh 246

ГИМ, собр. Хлудова, №246、17 世紀、Григорьев 1913: 1—235。ロシア語。

#### 第二世代

##### ⑨ Sol (現存せず)

Соловецкий список. №46、16 世紀ないし 17 世紀、Григорьев 1913: 1—235。ロシア語。

##### ⑩ Pet

Petrisov zbornik, 1468.

Badurina Stipčević, Vesna: Priča o Premudrom Akiru u hrvatskoglagojskom Petrisovu zborniku (1468).



クロアチアのグラゴール文字、ヤギッチが紹介（1868年）。

⑪ Lib

Дубровнишки сборник (Libro od mnozijek razloga), IV. a. 24 от ХАЗУ、1520年、326—376、издаден у Решетар 1926: 48—55。クロアチア語。ヤギッチが紹介（1868年）。

⑫ Rs 53

Рс 53 от НБС、16世紀（第3四半期）、37a—46a、46a—56a、издани у Станковић 1980: 222—225。ブルガリア西部の方言。

⑬ Der

Derečkajev zbornik (Eduard Hercigonja priredio je transkribiran tekst a paralelno se objavljuje i faksimil izvornika). 1621-1622年、ラテン文字、クロアチア語。

第三世代

⑭ A 326

НБКМ 326 (Аджарски сборник)、17世紀後半～18世紀初頭、76—116 (Цонев 1910: 315—320)。ブルガリア語。

⑮ Slavo 17

Cod. D. Slavo 17 (ЦСВП «Ив. Дуйчев»), 18世紀前半、346—516 (Христова, Джурова, Велинова 2000: 33—37)。ブルガリア語。

ヨノヴァらによれば、第一次ブルガリア帝国時代から ПАП が存在していたことは、いくつかのブルガリアの写本によって証明され、このような研究を進める際の重要な要素として以下のようなものを挙げています。

- 15世紀から17世紀において、種々様々な内容の諸作品から《文集》を編むという伝統が存在する。この《文集》は、オスマン帝国支配化に組み込まれたブルガリアや近隣諸地域で最も流布した形式である。
- 16世紀の三つの《文集》(⑥B 309、⑦P 101、それに現在は失われてしまった Ловчански сборник (15世紀末～16世紀初)の三つ)を比較すると、収められた作品群など、その編み方、構成が極めて似ており、さらに、《文集》内部における ПАП の置かれた環境もよく似ているのである。
- 三つの《文集》の類型的、また、系統的な結びつきから、より古い、共通の「原型」にさかのぼることも可能であると考えられる。その「原型」には、当然、ПАП も収められているはずである。

2-6. さて、ヤギッチによる紹介(1868年)以来、南スラヴ版の写本としては、第二世代の、⑩Pet、⑪Lib が広く知られていた。しかし、1980年代に、①S 29 が知られるに及び、上述のヨノヴァらブルガリア研究者の主張の蓋然性が高まったのです。それは、S 29 が ПАП の現存する最古のスラヴ語写本と考えられること、さらに、キエフ・ルーシではなくてブルガリアに極めて近い場所で発見されたことから支持されるのです。

クウジドヴァによれば、①S 29 は、第一世代のエディションに属する現存する最古の写本として注目されます。テキストはラシカの正書法に従うセルビア語だが、ブルガリア語の原典の痕跡が見えます(アオリスト語尾の古形や *х* など)。S 29 と直接に結び付く写本があるわけではないが、『文集』の構成という点では、②B 828 との類似性が強く、もちろん、⑥B 309、⑦P 101 との類似も見られます。一方で、S 29 が第一世代の写本であることは間違いないが、第二世代の⑪Lib、第三世代の⑭A 326 とも似た点があり、S 29 の一つの特徴ともなっているのです(クウジドヴァらの研究)。確認ですが、ロシアの第一世代としては、三点が知られます。

РГБ(ГБЛ), собр. ОИДР, №189、15 世紀末。

ГИМ, собр. Вахрамеева, №427、15 世紀末～16 世紀初。

ГИМ, собр. Хлудова, №246、17 世紀。

さらに、現在は失われてしまっていますが、『イーゴリ遠征物語』を含むムーシン＝プーシキンの著名な文集にも一編が収められていたことが、カラムジンの残した文章によって知られています。カラムジンが、ごく一部分、引用して書き遺した ПАП のテキストと ОИДР, №189 との比較は、ПАП それ自身の成立にとっても『イーゴリ遠征物語』の成立にとっても、貴重なヒントを与える物です。

第二世代としては、これも現存しないのですが、Соловецкий список (№46、16 世紀ないし 17 世紀)を、ドゥルノヴォがその著作の中で活字化したものによって、知ることが可能です。始めの三分の二くらいまでは第一世代的なエディションで、残りの部分は著しい改作(第三世代的な)が特色です。

ロシアの第三世代、第四世代は、テキストが縮められ、かなりロシア化されて民話的になっていて、ロシア文学界での物語・小説の芽生え、古い筋立てをフォークロア化する、などの潮流の影響から誕生したと言われます。15 世紀末には誕生していたはずであるが、現存する写本は 17 世紀前半からです(19 世紀までの約 45 点の写本が知られる)。

2-7. 中世スラヴ世界(とりわけ、ビザンツの影響下にあった地域)では、テキストの転写に際して、写し手は自らの教養や趣味の赴くまま、単なる機械的なコピーではなく、編むがごとく写本を作成したのです。従って、ПАП の各写本でも、極めて多くの異読箇所が出現します。そのような諸例の比較対照を進めることで、文献学的な写本研究を進めてゆきます。

以上のことを踏まえれば、先に挙げた三谷先生の研究、  
三谷恵子『賢者アキルの物語』南スラヴ圏写本の比較研究』 SLAVISTIKA、XXX、2015. 83-99  
頁。

Keiko Mitani. 2017. The Croatian Tradition of the Story of Akir the Wise in South  
Slavonic Recensions. SLOVO, sv. 67 (2017), 1–21. UDK 821.163-3“13/16“.09 75. 80.

The same relationship can be laid out in the stemma below.

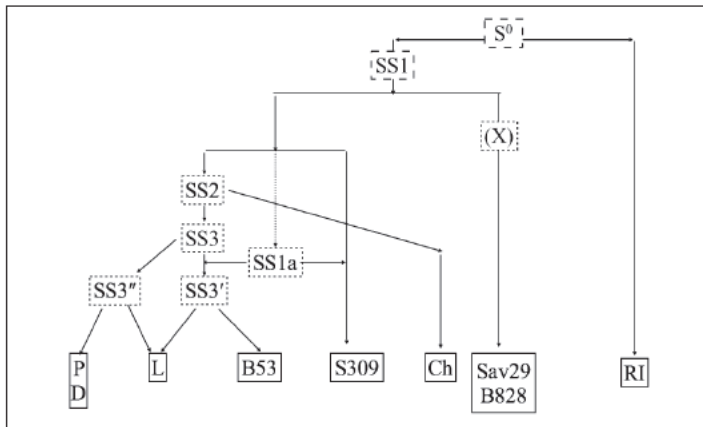


Fig. 2. The transmission pattern of South Slavonic SAW

といったお仕事の内容の理解が速いと思います。この際に注目したいことは、以下の言葉に象徴されます。

「そうした教会勢力圏の境界を超えて『アキル』は東から西へと伝わった。クロアチア・リセンションと B53 が同じ一つの起点テキストをもつことは、中世バルカン世界における文化情報ネットワークが、東西教会の境界を超えて形成され、写字生、あるいはさまざまなテキストの伝達と受容に関わった人々が、そこに最新の文化情報を入手するためのコネクションを持っていたことを物語っているのではないだろうか。」

この言葉から、世間で言われるような「かび臭い」文献学の殻を破って、より広く、今日的な視点からのアプローチを常に心がけていたことが読み取れます。

2-8. さて、その後の三谷文献学の展開を展望するヒントとなるのは、先ほど述べたスラヴ語訳の『賢者アキルの物語』に関して出てきた、《文集》と外典（がいてん）＝アポクリファでしょう。ビザンツ帝国の文化から深く影響を受けていた中世のロシアや南スラヴではさまざまな作品（外典、教訓説話、教父もの、百科全書の著作など）を集めた読み物風のアンソロジーがジャンルとして存在しており、ΠΑΠ の写本も、このような《文集》の構成作品として受け継がれてきた訳でした。三谷先生は、これらに特に関心を寄せて、

『十二の金曜日の物語』スラヴリセンシオン写本の比較研究』『ロシア語ロシア文学研究』48号、2016年、1-23頁。

『ヨアシ王の夢』—中世スラヴテキストの分析—』『ロシア語研究』26号、2016年、91-109頁。

『聖使徒ペテロとアンデレの異教徒の町への伝道物語』のスラヴ写本比較考察』

『SLAVISTIKA』33号、2017/2018年、125-144頁。

「スラヴ世界における Acta Thomae Minora (『小トマス行伝』) の伝統とグリゴローヴィチ・コレクシオン No.22」『ロシア語研究』29号、2019年、147-167頁。

『ヨブの遺訓』スラヴ語版 言語の変異性とテキスト属性の関係』『SLAVISTIKA』35号、2020年、471-486頁。

のようなお仕事を残されています。

これらの中から、まず『十二の金曜日の物語』スラヴリセンシオン写本の比較研究(『ロシア語ロシア文学研究』48号、2016年、1-23頁)を読んでいただくと、三谷文献学の精髓に触れやすいかと思います。ぜひ、取り組んでいただきたいと思います。

### 3 締めくくりとして

3-1.さて、最後のまとめに移りましょう。これまでのお話から、皆さんの中には、「もう、やる事が残っていないのでは？」と思われる方もいるかも知れません。しかし、決して、そんなことは有りません。

どのように優れた研究者でも、与えられた資料でしか考察が出来ません。ドブロフスキーも彼が知り得た文献の範囲内で「キリル文字が古い」と結論付けましたが、新資料の出現で、彼の説は否定され、グラゴール文字が先に考案されたことが定説になりました。三谷先生のお仕事に関しても、これから新資料の発見や、埋もれてしまっていた資料の再発見の可能性によって、これからの若い皆さんが「見直す」チャンスは有るのです。また、そのような新資料が無くても、三谷先生のお仕事を、先生とは異なる眼で、若い皆さんが改めて取り組み、その上で同じ結論が出たならば、それはそれで、自然科学での再実験、追実験のように、学説の強化につながり、意味が有ります。

以下の『十二の金曜日の物語』スラヴリセンシオン写本の比較研究の或るページで、三谷先生ご自身が論じているように、一つの作品の中に、それまでに蓄積されてきた文献文化の遺産が様々な形で取り込まれているので、たとえば、既知の「文集」類を改めて見直す事でも、「実は、あれのあの部分はこれの一部だったのかも」といった「再発見」の可能性が少なくないのですから。

三谷恵子

最近の C.B. イワノフの研究 (2011) は、エレウテリとタラシエの論争の描写が、T2 のほか、スウェーデン王立図書館写本 A797 (16 世紀) とロシア国立図書館ボゴージンコレクション No.1615 (1632 年) 中の写本に見出されることを明らかにしている。そしてこれらが、共通の写本から個別に派生したものであり、論争部分を含むその共通写本は、ロシアで作られたのだらうと述べている<sup>26</sup>。

しかし上記に引用したとおり、T2 の論争部分の冒頭は Sin34, Rs53 と完全に一致しており、ここから、これがロシアで作られたという可能性はほぼ否定される。ただし Sin34, Rs53 と T2 (およびロシアの 2 写本) で共通するのは上に示した部分に限られ、T2 ではこの後に、イワノフが指摘したように、『ヨアシ王の夢』という別の物語が取り込まれ<sup>27</sup>、いっぽう Sin34 や Rs53 では、旧約聖書の詩篇、箴言、あるいはホセア書や創世記の断片的な引用が続く構成となっている。つまり Sin34, Rs53 および T2 は、他の写本に対し、下の図 1 のような構成をとっていることになる。

【図 1 論争部の構成と他の写本との関係】

その他写本	Sin34	Rs53	T2
論争が頂点に達し 神の加護により エレウテリが勝利する	なぜ汝は聖三位一体、父と子と聖霊を信じないのか…		
	詩篇 110.3, 箴言 8.22-27, 9.1 など	旧約聖書ホセア書 (1.5-6) 創世記 49 などの断片	《ヨアシ王の夢》

現存する最古の写本である Sin34 に論争部分が含まれていることは、エレウテリとタラシエの論争を描いた部分が、《伝承》にもともと含まれていた可能性を強く示唆するといえるだろう。ただし Sin34 の論争後続部分が、断片的な聖書の引用の連続で構成されていることから、それに先立つテキストにこれらとは別の“論争”が描かれていたことも考えられる。いずれにしても、3 写本に見られる論争部分の異なりは、写本の伝播の中でローカルに書きかえられた結果と推察することができる。

上で述べた「もともと《伝承》に論争の描写が含まれていた」という仮定と、

— 12 —

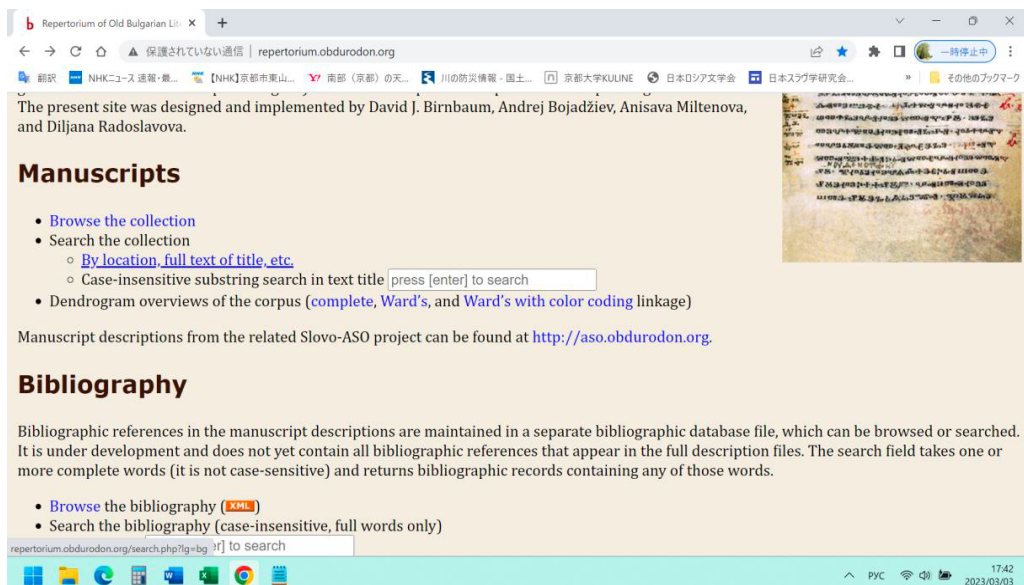
### 3-2. 最後に、研究の「とっかかり」を見つけるヒントを示しましょう。

近年はウェブ上から、様々な情報が得られます。オーソライズされた確かなウェブサイトにとどり着ければ、様々なヒントが手に入ります。そこから先は、実際のリアルのアーカイブ訪問を目指して進んで行って下さい。

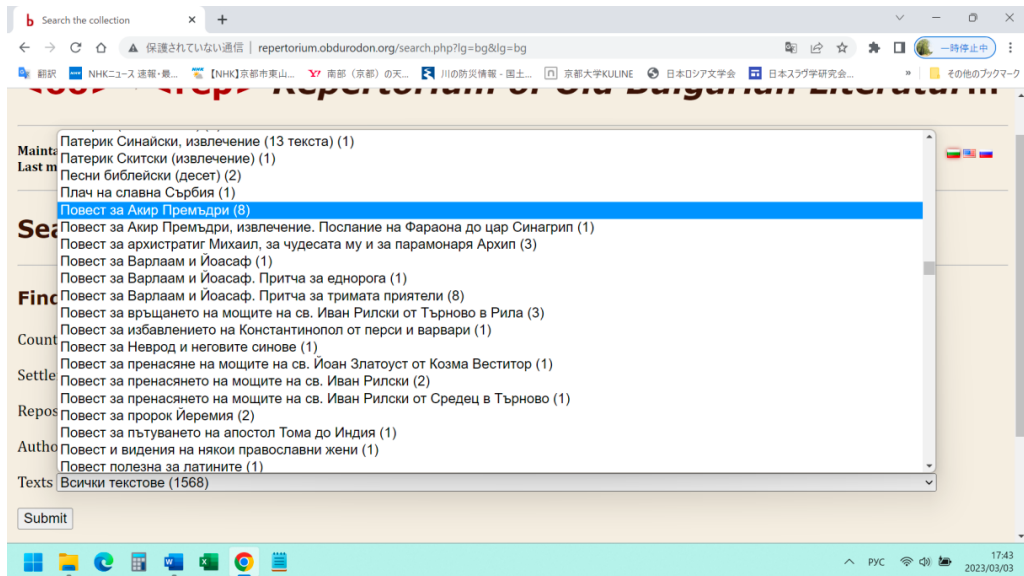
この分野の碩学ビルンバウムとブルガリアの研究者たちの成果が以下のサイトです。

<http://repertorium.obdurodon.org/>

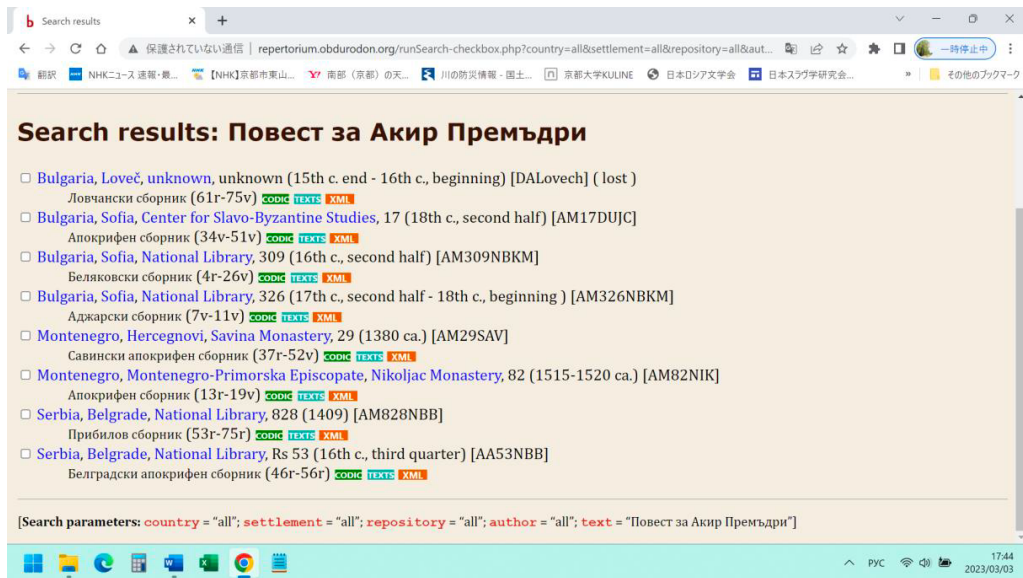
Manuscripts 欄の Search the collection で By location,をクリックします。



Search the collection→Find manuscripts→Texts 欄のプルダウンを押すと、アルファベット順に候補が出ます。『賢者アキールの物語』(Повесть за Акир Премъдри) をクリック。8 点の本が有ると分かります。Submit を押すと、下の結果が表示されます。







三つ目の『ベリャコフ文集』を選択して、TEXTS をクリックすると、文集に含まれる作品の一覧が出てきます。3 番目に『シャハイシャ王の十二の夢』（作品タイトルに異読のあることも写本を読む際の注意点の一つです）、9 番目に『十二の金曜日の物語』、『賢者アキールの物語』は 11 番目です。



Search results: Повест за Акир Премъдри

- ☐ Bulgaria, Loveč, unknown, unknown (15th c. end - 16th c., beginning) [DALovech] ( lost )  
Ловчански сборник (61r-75v) [CODIC](#) [TEXTS](#) [XML](#)
- ☐ Bulgaria, Sofia, Center for Slavo-Byzantine Studies, 17 (18th c., second half) [AM17DUJC]  
Апокрифен сборник (34v-51v) [CODIC](#) [TEXTS](#) [XML](#)
- ☒ Bulgaria, Sofia, National Library, 309 (16th c., second half) [AM309NBKM]  
Беяковски сборник (4r-26v) [CODIC](#) [TEXTS](#) [XML](#)
- ☐ Bulgaria, Sofia, National Library, 326 (17th c., second half - 18th c., beginning ) [AM326NBKM]  
Аджарски сборник (7v-11v) [CODIC](#) [TEXTS](#) [XML](#)
- ☐ Montenegro, Hercegnovi, Savina Monastery, 29 (1380 ca.) [AM29SAV]  
Савински апокрифен сборник (37r-52v) [CODIC](#) [TEXTS](#) [XML](#)
- ☐ Montenegro, Montenegro-Primorska Episcopate, Nikoljac Monastery, 82 (1515-1520 ca.) [AM82NIK]  
Апокрифен сборник (13r-19v) [CODIC](#) [TEXTS](#) [XML](#)
- ☐ Serbia, Belgrade, National Library, 828 (1409) [AM828NBB]  
Прибидов сборник (53r-75r) [CODIC](#) [TEXTS](#) [XML](#)
- ☐ Serbia, Belgrade, National Library, Rs 53 (16th c., third quarter) [AA53NBB]  
Белградски апокрифен сборник (46r-56r) [CODIC](#) [TEXTS](#) [XML](#)

[Search parameters: country = "all"; settlement = "all"; repository = "all"; author = "all"; text = "Повест за Акир Премъдри"]

<oo> → <rep> Repertorium of Old Bulgarian Literatur...

Maintained by: David J. Birnbaum ([djbpiitt@gmail.com](mailto:djbpiitt@gmail.com)) [CODIC](#) [XML](#) [PDF](#) [Image](#) [Map](#)

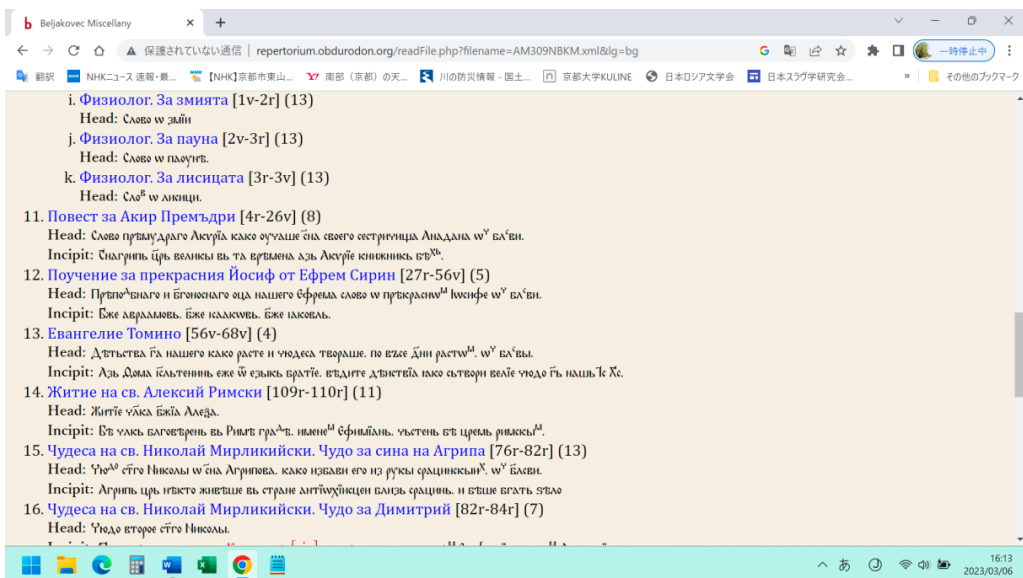
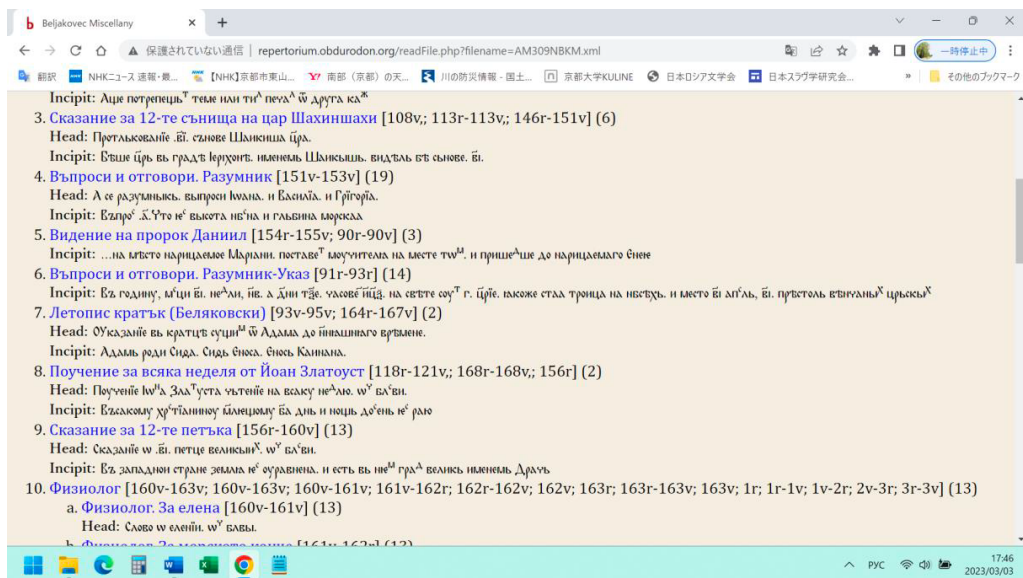
Last modified: 2016-07-02T14:54:48+0000

## Беяковски сборник

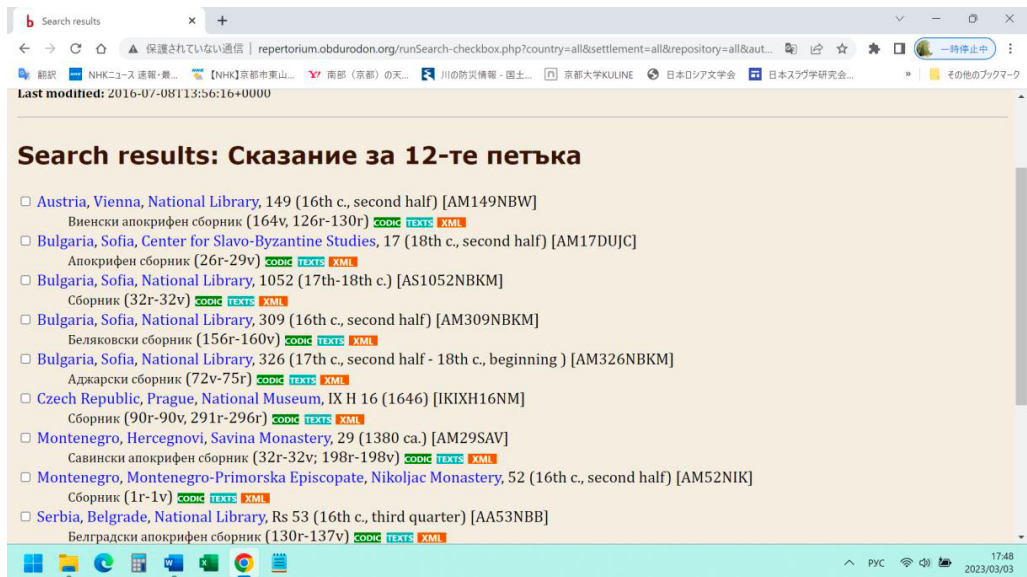
### Bulgaria, Sofia, National Library 309

#### Contents

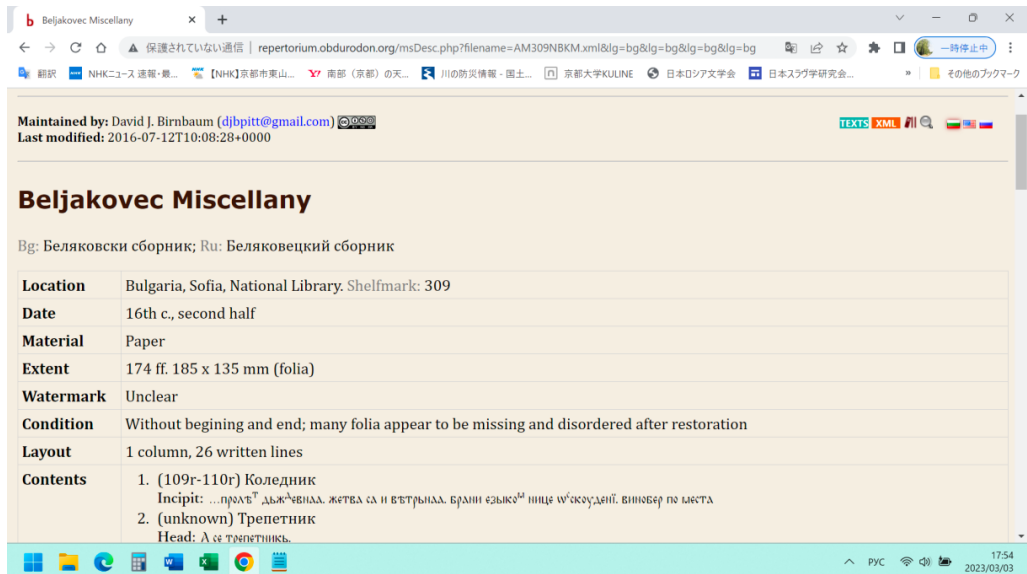
1. Коледник [109r-110r] (8)  
Ісріт: ...проуѣ<sup>т</sup> дѣж<sup>а</sup>овина. жетѣ са и етърина. брани ежѣко<sup>м</sup> нивѣ ѿскоудѣні. вниовѣ по мѣста
2. Трѣпетник [110r-110v; 108r-108v] (5)  
Head: А се трѣпетникъ.  
Ісріт: Аци потрѣпецъ<sup>т</sup> тѣмъ или тѣ<sup>а</sup> пѣча<sup>а</sup> ѿ дѣруга ка<sup>а</sup>
3. Сказаніе за 12-те сѣнища на цар Шахиншахи [108v; 113r-113v; 146r-151v] (6)  
Head: Протѣмѣмѣніѣ .ѣ. езиовѣ Шахиншахъ Цѣра.

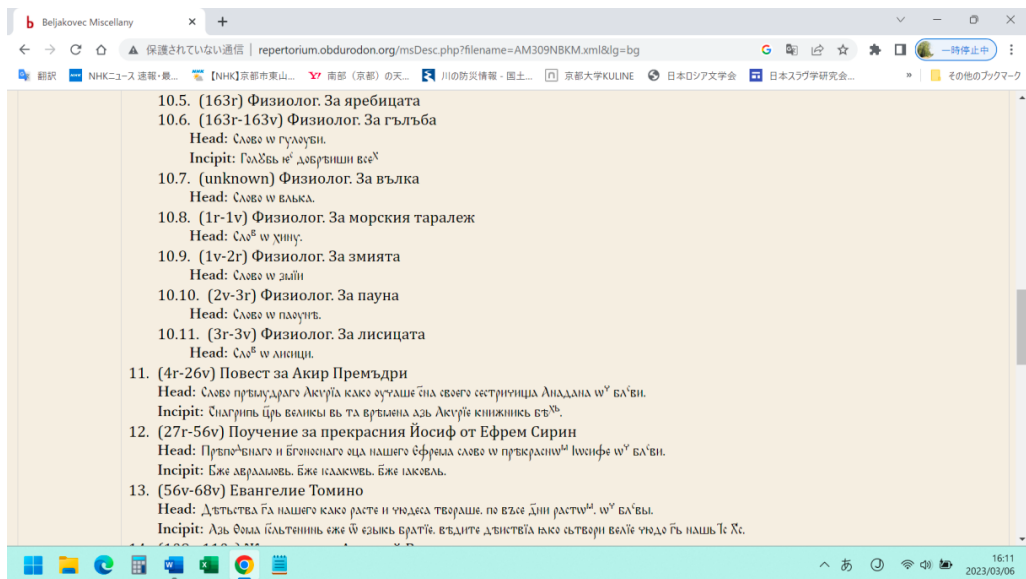
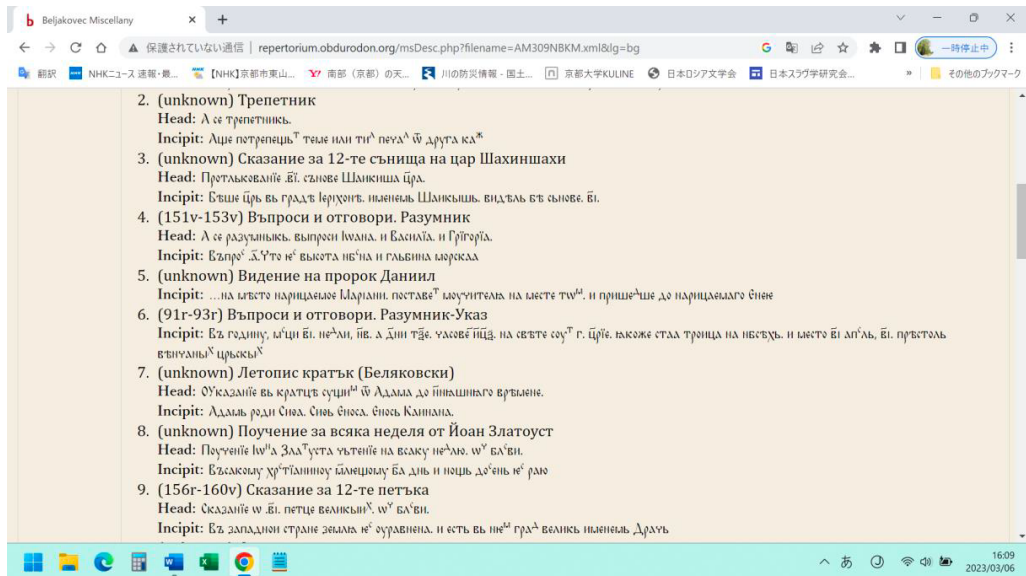


ここで、9 番目の『十二の金曜日の物語』をクリックすると、これを含む写本が示されます。13 点あることも分かります。



この画面なら4番目（最初の『アキール』を探した画面なら3番目）の『ベリャコ文集』のCODICをクリックすれば、以下のような写本の概要が出ます。

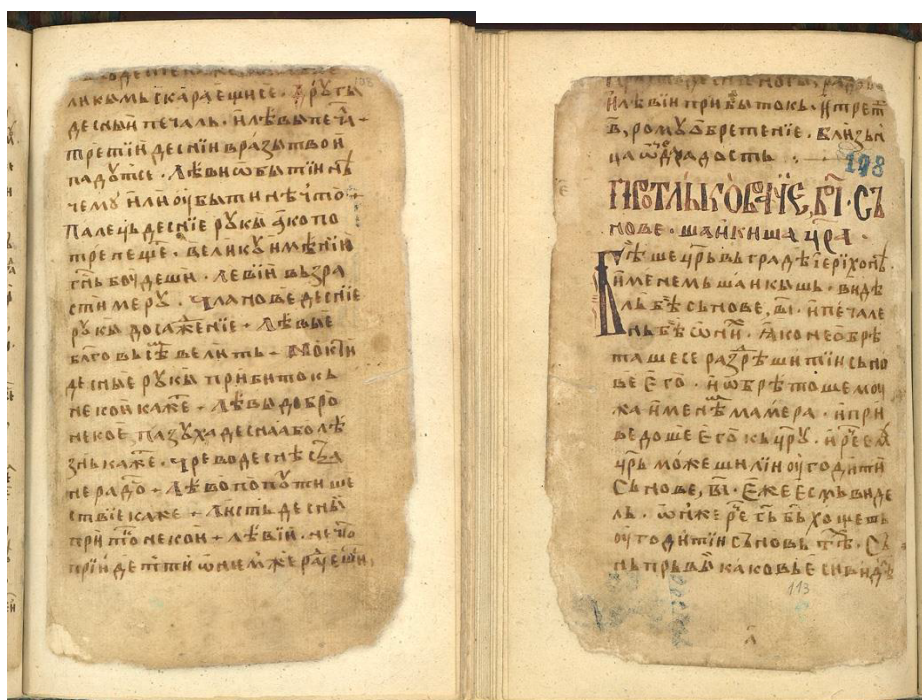




3 番目の『シャハイシャ王の夢』の文集内での配置が「unknown」と表示されますが、先に示したテキストのページでは、具体的な葉数が示されていました (108v, 113r-113v, 146r-151v)。

ウェブを探していると、写真が PDF でダウンロード出来ることも有ります。例は『ベリャコ文集』から『シャハイシャ王の夢』の冒頭です。





108r

108v

始めは戸惑いますが、以下のような教科書を参考にして読み進めて下さい。

М.Н. Тихомиров, А.В. Муравьев Русская палеография -- Изд. 2-е, доп -- "Высшая школа", 1982.

В.Н. Щепкин Русская палеография -- 3-е доп. изд. / [научный редактор Е.Ф. Васеко] -- Аспект пресс, 1999 -- (Классический учебник).

とりとめのない話になりましたが、ご清聴有り難うございました。

#### 参考事項

三谷先生の『『賢者アキルの物語』南スラヴ圏写本の比較研究』関連の参考文献

Белоброва О. А., Творогов О. В. Переводная беллетристика XI–XIII вв. // История русской беллетристики. Л., 1970.

Волкова Т. Ф. Повесть об Акире премудром в печорской рукописной традиции // Известия Уральского федерального университета, Серия 2. 2011. 90.

Гладкова О. В. «Повесть об Акире премудром» // История древнерусской литературы. Аналитическое пособие. М., 2008.

Григорьев А. Д. Повесть об Акире Премудром. Исследование и тексты. М., 1913.

Дурново Н. Н. Материалы и исследования по старинной русской литературе. 1. К истории

повести об Акире. М., 1915.

Йонова М. Разпространение и развитие на Повестта за Акир премъдри в средновековните литератури на южните и източните славяни // Старобългаристика. 1987. XI.

Кузидова И. Преписът на Повестта за Акир премъдри в ръкопис №29 от манастира Савина (около 1380 г.) // Пъние мало Гевргию. Сборник в чест на 65годишнината на Проф. ДФН Георги Попов. София, 2010.

Перетц В. Н. К истории текста <<Повести об Акире Премудром>>. — ИОРЯС, 1916, т. 21, кн. 1, с. 262—278.

Пиотровская Е. К. Усть-цилемская обработка Повести об Акире премудром // ТОДРЛ. 1976. XXXI.

Пиотровская Е. К. О III. русской редакции Повести об Акире премудром // Вспомогательные. исторические дисциплины. 1978. X.

Пичхадзе А. А. Переводческая деятельность в домонгольской Руси: лингвистический аспект. М., 2011.

Творогов О. В. К вопросу о датировке Мусин-Пушкинского сборника со «Словом о полку. Игореве» // ТОДРЛ. 1976. XXXI.

Творогов О. В. «Повесть об Акире премудром» // Словарь книжников и книжности древней Руси. Вып. 1. (XI — первая половина XIV в.) Л., 1987.

Творогов О. В. «Повесть об Акире премудром» // БЛДР, т. 3 (XI-XII века). СПб., 1999.

Турилов А. А. Межславянские культурные связи эпохи средневековья и источниковедение. истории и культуры славян. М., 2012.

B. Lourié The Syriac Ahikar, Its Slavonic Version, and the Relics of the Three Youth in Babylon. *Slověne* Vol. 2(No. 2); 64-117.

F. J. Thomson *The Reception of Byzantine Culture in Mediaeval Russia*. Aldershot, 1999.

小堀桂一郎『イソップ寓話』講談社学術文庫 1495、2001。

新村出、柊源一校註『吉利支丹文学集2』東洋文庫 570、1993 年。

#### 略記一覧

ГИМ	Государственный исторический музей.
НБКМ	Народная б-ка «Кирилл и Мефодий».
НБС	Народная б-ка Сербии.
ОИДР	Общество истории и древностей российских при Московском университете.
РГБ	Российская государственная б-ка.

XAZU Hrvatska akademija znanosti i umjetnosti, cirilska zbizka.

(HAZU)

ЦСВП Център за славяно-византийски проучвания „Проф. Иван Дуйчев”

## 司会

服部先生のお話を聞いていただきました。スラヴィスチカに三谷先生はコンスタントに投稿されていましたし、学会誌などに投稿された論文はネットからダウンロードすることができますので、ぜひご参考なさってください。

では恩田先生お願いいたします。

## 応答 恩田義徳「写本とにらめっこ」

東京外国語大学などで、ロシア語の非常勤講師をしています恩田義徳です。三谷先生に直接授業で教わったことはないのですが、学会などを通じて随分とお世話になりました。今日は「写本とにらめっこ」という、三谷先生自身の言葉を軸として、三谷先生の研究から我々は一体何を学ばなければいけないのかということをお話したいと思います。

先ほど服部先生の方から文献学について詳しい解説がありました。僕の方では、文献学の「古い文献を読む」という部分にフォーカスを当てて話をしたいと思います。服部先生のお話の中にもありましたが、古い文献を読むときには、テキストをひたすら丁寧に読んでいくということが必要になってきます。100%の精度で読む、あるいは100%の精度を目指して読む、ということが基本的な姿勢になります。とにかくテキストに真摯に向き合うということ、木村彰一先生は「テキストがアルパであり、オーメガである。」という表現をされていたと、明治大学にいらっしゃった岩井先生から伝え聞いています。

文献学で扱うテキストは、古い時代のものは写本になります。手書きで写された1点もののテキストです。文献学というと、こういった手書きの文献を読むというイメージが、一般の人たちにはあるのではないかと思います。けれどもそれはあくまで「理想」であって、実際に手書きの写本そのものを直接読むということについては、いくつか難しい問題があります。ひとつ目は、写本自体が図書館であったり博物館に収められていて、そもそも現物を手に取って見られないということ。またファクシミリ版のようなものが出版されていて、写真やウェブサイトで原本を閲覧することができるようになることがあります。それでテキストが読めるかというと、そういうことでもありません。（実物の写本の画像を）見てもらうと分かると思いますが、写本の文字を読もうと思うと、それはそれで特殊な訓練というか、慣れが必要になってきます。当然のことながら写本でテキストを読むという作業は、ものすごく手間と時間がかかります。今はある程度業績の数を揃えなければいけない、というような風潮がありますので、

若い学生・研究者にはなかなか手が出しにくい部分があります。

そこでスラヴ文献学では、校訂テキストを読むということが一般的です。これは写本を（グラゴル文字はキリール文字に置き換えて）活字にして、単語の間のスペースを空けて読みやすくし、さらに注釈や語彙集をつけたものです。こうしたものをテキスト（底本）として読むということが、文献学の研究として多く行われています。また近年では、文献学で扱われるようなテキストを電子コーパス化したものがすでに整備されています。今、画面でご覧になっているのは、マリア写本という古代教会スラヴ語の福音書のテキストです。グラゴル文字をラテン文字と記号とで置き換えて、電子処理がしやすいように整えられています。僕自身の研究では、公開されている電子データを使って、パラレルテキストを自作しました。つまり、いくつかの写本のテキストを福音書の章句ごとに並べて見られるようにする。そうすることで写本の間の違いがパッと見えるようにしました。古代教会スラヴ語のテキストをマクロな視点から見るという試みです。さらに海外の研究では、例えば古代教会スラヴ語のアスペクトなどを調べる際に、このコーパスを用いて統計学的な処理を行うというような手法が、もうすでに行われています。

実際にこういうテキストを電子的に処理するという作業を行って、すごく気にかかっていたことがあります。電子化をして、テキストが利用しやすくなるのですが、その際に本来写本が持っていた情報がどんどん少なくなっていくます。例えば写本に書き込みがしてあったとか、文字がかすれているとか、そういった情報は失われてしまう。さらに校訂テキストについていた注釈も、電子コーパスでは普通反映されないで、落ちてしまう。さらにテキストの入力に際しては、当然タイプミスが入り込む余地があります。こういった電子化、パラレルコーパス化という手順を踏んでいく中で、本来精密に読むべき文献学的なテキストを電子的なデータとして扱うことに対して、「それでいいのか」という葛藤がありました。

そういうことを考えていた時に、三谷先生と研究で一緒することがありました。三谷先生は文献学にどのように取り組んでいたかということがわかるエピソードがありますので、それをご紹介します。2019年のロシア文学会の時のことですが、この年がちょうどコンスタンティノスの没後1150年にあたるということで、パネルを組んで同じテーマで研究をしないかというお誘いをいただきました。三谷先生自ら提案してくださって、服部文昭先生それから僕と三谷先生とそれから田中大さんが報告者で、コメンテーターを丸山由紀子先生にお願いして行いました。この時の三谷先生の発表のテーマが「クロアチア・グラゴル派の聖務日課書の中のコンスタンティノス一代記」というものでした。実はこのテーマは三谷先生にとっては初めてではなく、それ以前に一度着手されたことがある研究だったそうです。しかし当時は十分に研究が行えなかった、そういう思いがあったために、再び研究テーマとして取り上げたということです。今回改めて取り組んだ理由のひとつに、かつては原本の閲覧ができなかったのもう 1



回やりたいんだ、というような話がありました。この報告のタイトルの「写本とにらめっこ」しているという言葉は、このパネルの打ち合わせの中で出てきた言葉です。

すでに述べたように、古い文献の写本の閲覧は難しいことが多いのですが、何らかのタイミングでそれが可能になることがあります。三谷先生はそれが可能になった段階で、もう一度研究をやり直そうと考えられた。対象が写本ですから、これを読もうとすると当然時間がかかります。そういう作業が「にらめっこ」という言葉に集約されているのではないかと僕は考えました。文献学において研究の素材であるテキストに対して決して妥協しない、諦めない。さらに時間をかけるということを決して厭わない、そういった態度をわれわれ若い研究者たちも、見習わなければいけないだろうと思います。以上になります、ありがとうございました。

司会

恩田先生どうもありがとうございました。

### 第3部

司会

第3部は東欧文学ということで奥彩子先生と亀田真澄先生にご発言いただきます。

報告 奥彩子「三谷先生と東欧文学——紛争地域の文学を翻訳すること」

東欧文学の特徴

本報告では、三谷先生が訳された作品を見ることによって、「東欧文学」について考えたいと思います。ご翻訳は、旧ユーゴスラヴィア地域の文学に限られますので、まず、先生の「東欧文学」観について、編集委員の一人を務められた『中欧・東欧文化事典』にお寄せになった「東欧の文学」の項目を見てみましょう。東欧の共通項としてあげられるのは「文化的多様性、多重性」で、言語、文字、宗教の多様性が例示されます。そのうえで、その多様性が生まれた背景でもある、歴史的な共通点について、「歴史のどこかの段階で他民族からの支配を受け、自らが支配文化となったことがない」こと、「植民地支配という経験を持た」ないために「言語文化には土着性、ローカル性という特徴が付随」したこと、さらに、「20世紀には、共産主義圏に含まれたことで、検閲や表現的制約の中で、いかに芸術としての言語文化を生成するかという課題に直面した」と説明されています。そうした歴史を共有するなかで、

東欧文学には「暗い」「重い」といったイメージで捉えられる内容のものが少なくない。とはいえそこにはまた、抑圧やマイナー性を強烈なアイロニーや自虐的ユーモアに転換して表現

する文学的狡猾さと、時系列の断片化や既存の価値観の無効化によって、世界の価値を反転させる技法が内在していることも、見逃すことはできない<sup>9</sup>。

と、その文学的な特徴をまとめておられます。

#### ユーゴスラヴィアに関する基本情報

三谷先生による東欧文学の特徴の指摘を押さえたうえで、旧ユーゴスラヴィア諸国について、まずは現在の構成を確認しておきますと、スロヴェニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、セルビア、モンテネグロ、コソヴォ（セルビアは独立を承認していません）、北マケドニアの七か国になっています。

「ユーゴスラヴィア」という国家を端的に表すためにティト大統領が使ったとされるのが、「七つの国境、六つの共和国、五つの民族、四つの言語、三つの宗教、二つの文字、一つの国」という言い回しです。七つの国境とは、イタリア、オーストリア、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、ギリシア、アルバニア、六つの共和国とは、スロヴェニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、セルビア、モンテネグロ、マケドニア、五つの民族とは、スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人、モンテネグロ人、マケドニア人、四つの言語とは、スロヴェニア語、クロアチア語、セルビア語、マケドニア語、三つの宗教とは、カトリック、正教、イスラーム、二つの文字とはラテン文字とキリル文字、これらが混在する一つの国がユーゴスラヴィアというわけです<sup>10</sup>。

もちろん、これ以外にも民族としてはアルバニア人、ハンガリー人が少なからず住んでおり、ロマ、ルシン人のような少数民族、あるいは自らをユーゴスラヴィア人とみなす人もいました。1968年にはムスリムが民族として承認されてもいます。同様に、言語も定型句では表しきれない多様性を備えていますが、ともあれ、これらは多様性に富んだ地域が「一つの国家」として団結することを表すための言い回しでした。

次に、ユーゴスラヴィアという国家について時系列で把握しておきたいと思います。南スラヴ統一主義（ユーゴスラヴィズム）は19世紀にハプスブルク帝国内で浸透しはじめ、1905年には「クロアチア人・セルビア人連合」がクロアチア議会選挙で第二党になるなどして、政治的な協力関係が構築されていきました。こうした経緯があって、第一次世界大戦後には「セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国」が樹立されます。この国家はセルビアが中心となっていたため、とくにクロアチア側で反発が強く、国家としてなかなか安定しませんでした。

<sup>9</sup> 三谷恵子「東欧の文学」『中欧・東欧文化事典』丸善出版、2021年、360頁。

<sup>10</sup> 詳細は、鈴木健太、百瀬亮司、亀田真澄、山崎信一『アイ・ラブ・ユーゴ1』社会評論社、2014年、6-11頁を参照のこと。

国王は議会制から独裁制への移行を決め、1929年にはユーゴスラヴィア王国に名前を変えます。これが「第一のユーゴ」と呼ばれる国家です。この転換は各地で大きな反発を呼び、国王は外遊中にクロアチアの民族主義集団ウスタシャに関係する青年に暗殺されました。第二次世界大戦が始まると、ナチスの傀儡国家であるクロアチア独立国が樹立され、ユダヤ人のみならずセルビア人も虐殺の対象となりました。ティトー率いるパルチザンは、民族・地域を越えた連帯、ドイツによる占領からユーゴスラヴィアの解放を訴えて、各地で支持を拡大しました。パルチザンはソ連軍との合同作戦によってドイツ軍を退け、憲法制定議会選挙で圧勝し、1945年にはユーゴスラヴィア連邦人民共和国が建国されます<sup>11</sup>。

こうして成立した社会主義国としてのユーゴスラヴィアは、「第二のユーゴ」とも呼ばれます。この間、コミンフォルムの追放、クロアチアの春などを経験しますが、そのたび、ティトーの強力な政治力によって国家の安定が図られてきました。74年憲法では緩い連邦制が敷かれ、ティトーは終身大統領として国家統合の象徴ともなりました。ですが、そのティトーが亡くなった1980年以降、ユーゴスラヴィアは経済の悪化などを背景に、民族主義を唱える政治家らが台頭し、国家解体への道を進むことになります。とはいえ、現在が解体への道のりにあると感じていた人はどれくらいいたのでしょうか。セルビアのユダヤ系作家ダヴィド・アルバハリは1989年の夏にブリティッシュ・カウンシルが主催したケンブリッジでのセミナーに参加し、セミナー後にジョージ・スタイナーが「数年以内にユーゴスラヴィアで戦争が起こるだろう」と発言するのを聞いて「そんなことがあるはずはない」と思ったことをエッセイに書いています<sup>12</sup>。三谷先生がザグレブに留学をされていたのは1986年から88年のことですから、解体が必然のものとして浮かび上がっている時代ではなかったものと思います。

1991年にスロヴェニア、クロアチアの独立宣言と戦争の勃発、92年にはボスニア・ヘルツェゴヴィナの独立宣言と戦争が始まり、「友愛と統一」を理念に掲げた国家ユーゴスラヴィアは解体していきます。ヨーロッパで起きた苛烈な戦争は世界中の注目を集め、日本でもテレビや雑誌で特集が組まれたり、文学作品の翻訳が出版されたりしました。 Dayton合意によってボスニア戦争が一応の終結を見たあと、各共和国がそれぞれに独立国家となっていくって、冒頭にお話しした現状に至ります。

時系列をたどってユーゴスラヴィアの歴史を簡単にご説明してまいりましたが、いつ、ユーゴスラヴィア地域に関心を持ち、研究を始めたのかは、その研究者の「ユーゴスラヴィア観」に大きく影響しているように思います。三谷先生のようにユーゴスラヴィアが国家として存在していた時代に研究を始め、留学を経験している方もいれば、私のように90年代の戦争時にユ

<sup>11</sup> ユーゴスラヴィアの歴史については、柴宜弘『ユーゴスラヴィア現代史 新版』岩波新書、2021年を参照のこと。

<sup>12</sup> David Albahari, "Godzilla in Kosovo," *GEIST* [<https://www.geist.com/fact/dispatches/godzilla-kosovo/>] (2023.6.14 閲覧)

ユーゴスラヴィアを知り、統一国家を存在するものとしてではなく、なくなっていくものとして見ていた者、さらには、コメンテーターをしてくださる亀田真澄先生のように、ユーゴスラヴィアという国家はすでになく各国共和国となってから研究を始めた方、それぞれが原体験としても「ユーゴスラヴィア」のちがいは、その把握にも少なからず影響するのではないのでしょうか。

### 三谷先生の訳業

さて、ここからは三谷先生が訳された旧ユーゴスラヴィア地域の文学についてご紹介したいと思います。クロアチア、ボスニア、セルビアの作品を翻訳されており、時代は第二のユーゴの時代から 90 年代の戦争期がほとんどです。

最初に翻訳をされたのは、スラヴェンカ・ドラクリッチの『バルカン・エクスプレス』です。原著は 1993 年の刊行、三谷先生による日本語訳の刊行が 95 年ですから、タイムラグが少なく、訳されたことがわかります。ドラクリッチはクロアチアの港町リエカの出身で、ナショナリズムに染まるクロアチアの知識人たちを批判したジャーナリストです。三谷先生はあとがきでドラクリッチについて、「フェミニズムの闘士としても有名で、1979 年にはユーゴ最初のフェミニズム運動グループを創設、東欧の女性運動グループのネットワーク組織の指導者的存在とみなされている。人呼んで、「東欧のシモーヌ・ド・ボーヴォワール!」と紹介され、ドラクリッチの明るい人柄についても触れておられます。これは「暗く」「重い」現実を語る作品の刊行にあたって、そこに生きる人びとの、それでも挫けず明るく生きる姿を示す必要を感じられたからではないでしょうか。また、のちにはあまり語られない、三谷先生ご自身の戦争への感じ方もまた、この本のあとがきには書かれています。

「もし戦争を生き延びることができるものがあるとすれば、それは墓くらいなものだろう」とスラヴェンカが書いていたのを思い出した。ほんとうに、墓地はこの国の歴史そのもののようだ。異なる宗教が、多少の軋轢や確執はあっても、ともかくも肩を寄せあい、助けあって生きてきたのだ。ミロゴイの一角に、この内戦で命を落とした兵士——少し前まではごく普通の市民生活を送っていた若者たち——の墓が並んでいる。真新しい大理石の墓石に夏の日差しが白く反射してまぶしい。そこに刻まれた一つの墓碑銘が目に入った。たった一言、ALI ZAŠTO? (でも、どうして?) とあった。<sup>13</sup>

「でも、どうして?」という短い問いかけは、国家としてのユーゴスラヴィアを生きてきた

---

<sup>13</sup> スラヴェンカ・ドラクリッチ (三谷恵子訳) 『バルカン・エクスプレス——女心とユーゴ戦争』三省堂、1995 年、246-247 頁。

多くの人が胸に抱えていた問いかけであつたろうと思いますし、三谷先生ご自身の心のうちを示しているようにも思います。ドラクリッチはその後も英語圏で文筆活動を続け、今年には、栃井裕美さんの訳による『ポスト・ヨーロッパ』が人文書院から出版されています<sup>14</sup>。

次に三谷先生が訳されたのは、同じくクロアチア出身の作家ドゥブラヴカ・ウグレシッチの短篇「君の登場人物を貸してくれ」です<sup>15</sup>。こちらは岩波書店による「世界文学のフロンティア」シリーズの第二巻『愛のかたち』に収録されています。ドラクリッチ同様に、ナショナリズムを批判し、国外移住をした作家を選んでおられることに、こうした姿勢への共感がうかがえるように思います。訳者による紹介文では、「クロアチア語で書く作家」とされていて、民族が特定されていない点に、細かな配慮が感じられます。ウグレシッチはお父さんがクロアチア出身、お母さんはブルガリア出身ですし、ユーゴスラヴィアを自らのアイデンティティーとしていました。その彼女を「クロアチア人」と表現することは、とくに 90 年代にはある種の暴力と同じでした。訳された作品は 83 年の短篇集『人生はおとぎ話』に収録された一篇です。「あつあつパンのホットドッグ」はゴーゴリの『鼻』、「人生はおとぎ話」は読者の投稿、「わたしはだれ」は『不思議の国のアリス』、「クロイツェル・ソナタ（新作）」<sup>16</sup> はトルストイの『クロイツェル・ソナタ』を、それぞれ下敷きにしていますが、三谷先生が選ばれた「君の登場人物を貸してくれ」は主人公が作家で作品を書くというメタ・フィクションとなっていて、工夫が凝らされた一作です。エロティックな雰囲気も漂う作品で、「暗く」「重い」東欧文学とはまったくイメージが異なります。

クロアチア出身の女性による作品を訳されたあと、しばらくあけて、2009 年に出版されたのが、セルビアの作家ミロラド・パヴィッチの『帝都最後の恋』です。パヴィッチについては、2021 年秋に短篇集『十六の夢の物語』も出版されています。じつは、『帝都最後の恋』や短篇については、私が京都大学の修士課程の学生だった折に、セルビア・クロアチア語の授業で講読をした作品でした。三谷先生が京都大学に着任されたのは 99 年ですが、私はちょうどその年の秋からベオグラード大学に留学をしまして、2000 年秋、ミロシェヴィチ政権が打倒される直前に帰国しました。三谷先生の授業には数名の学生のほかに、京都大学文学部スラブ語学スラブ文学専修の佐藤昭裕先生もご出席されていました。パヴィッチの作品は佐藤先生がとくに気に入っておられて、三谷先生もお好きだったので授業の題材になったのだと思いますが、パヴィッチ好きの方にはお分かりいただけると思うのですが、とりあえず、難しいです。なにせスト

<sup>14</sup> スラヴェンカ・ドラクリッチ（栃井裕美訳）『ポスト・ヨーロッパ——共産主義後をどう生き抜くか』人文書院、2023 年。

<sup>15</sup> ドゥブラヴカ・ウグレシッチ（三谷恵子訳）「君の登場人物を貸してくれ」世界文学のフロンティア 2 『愛のかたち』岩波書店、1996 年。

<sup>16</sup> ドゥブラヴカ・ウグレシッチ（奥彩子訳）「クロイツェル・ソナタ（新訳）」奥彩子ほか編『世界の文学、文学の世界』松籟社、2020 年。

ーリーの展開が普通ではないことが多いので、正確な語学力がなければすぐに誤読してしまいます。文法を熟知し、また曖昧な解釈をされない三谷先生のもとでこうした作品の読解に取り組めたことは私自身にとって大きな財産となりました。

ところで、パヴィッチといえば、アメリカの比較文学者デイヴィッド・ダムロッシュが『世界文学とは何か』<sup>17</sup> で取り上げ、民族主義者として提示したことで知られています。たしかに、パヴィッチは「ユーゴスラヴィア主義」の作家ではありません。三谷先生は『帝都最後の恋』の解説で、パヴィッチについて次のように述べられています。

一九二九年十月十五日ベオグラード生まれ。わざわざ日付まで紹介するのは、この十日あまり前にユーゴスラヴィアが誕生しているためである。一九一九年に、セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国として誕生した国家は、パヴィッチの誕生する数日前に、国王アレクサンダルを摂政として「ユーゴスラヴィア」と国名を改めた。だからパヴィッチは、この第一のユーゴスラヴィア、第二次世界大戦後に再建された第二のユーゴスラヴィア、そしてかつての連邦諸国が抜けた後二〇〇三年まで続いた第三のユーゴスラヴィアと、歴史上存在した三つのユーゴスラヴィアを生き抜き、そしてその間一度として「ユーゴスラヴィア作家」にはならず、つねにセルビアの、かつまたどこかの夢の国の作家として物語を生み出してきた文学者ということになる。<sup>18</sup>

とはいえ、それをすぐにナショナリズムと理解してよいのか。この点について、『十六の夢の物語』の解説では、次のように述べられています。

作品の表現形式だけではなく、読みの形まで変えてしまおうという文学的創作の試みは、やはり、東西文化の混交と複雑な歴史の生み出した多彩な文化を記憶し、また大胆な文学実験を許容するユーゴスラヴィアの風土が生み出した産物といえるかもしれない。

しかし、ユーゴスラヴィアは1990年代に解体し、体制転換が内戦というもっとも暴力的な形をとまって起こった。この中で、あるいはこの結果、すべてをナショナリズムという枠に押し込めてしまおうとするさまざまな言説が現れ、ユーゴの多くの作家たちがその文学的価値を矮小化され、歪んだプリズムを通して読まれるようになったのは、残念というほかない<sup>19</sup>。

---

<sup>17</sup> デイヴィッド・ダムロッシュ（秋草俊一郎・奥彩子・桐山大介・小松真帆・平塚隼介・山辺弦訳）『世界文学とは何か』国書刊行会、2011年。

<sup>18</sup> ミロラド・パヴィッチ（三谷恵子訳）『帝都最後の恋』松籟社、2009年、178-179頁。

<sup>19</sup> ミロラド・パヴィッチ（三谷恵子訳）『十六の夢の物語』松籟社、2021年、205頁。

文学作品に過度にナショナリズムを見出して批判することは、作品をナショナリズムの観点から称揚することと実は表裏一体であり、文学作品の読解を貧しくする行為にほかならないというスタンスにおいて、三谷先生の翻訳姿勢は一貫しているといえるでしょう。

パヴィッチの次に訳されたのが、ボスニア出身の作家メシャ・セリモヴィッチの代表作『修道師と死』です。クロアチア、セルビアのあと、ボスニアの作品を訳すことで、主要三地域の長篇作品を一つずつ訳されたことになります。三谷先生が初めてセリモヴィッチに言及をされたのは、2005年、沼野先生が編者となって刊行された論集『ポスト共産主義時代のクロノトポス』に収録された論文「Bila jednom jedna zemlja...—旧ユーゴ各地のメディア、言語、そしてアイデンティティー」<sup>20</sup> においてではないかと思います。このセルビア語のタイトルは、エミール・クストゥリツァ監督の映画『アンダーグラウンド』(1995)の原作となった、劇作家ドゥシャン・コヴァチェヴィッチの小説の表題で、映画内でも最後の場面で語られます。「むかし、ひとつの国がありました」。論文はタイトルにふさわしく、ボスニア出身のムスリムであったクストゥリツァがセルビアに寝返ったこと、またボスニアでどのように報じられているかについて詳細に分析されています。そのクストゥリツァと重ね合わさる人物として触れられるのが、メシャ・セリモヴィッチです。セリモヴィッチもまた、ボスニアのムスリム家庭の出身で、ボスニアを題材とした小説で名声をえながら、セルビアに移住をし、自らをセルビア文学の作家と名乗りました。『修道師と死』の訳者解説は、セリモヴィッチのインタビューの引用を多く行うことで、アイデンティティーの決めつけを避けています。1970年のインタビューから印象的な箇所をご紹介します。

おそらく、歴史の中の平坦ではなかった道のり、絶え間ない不幸、歴史の運命のせいなのでしょう。ボスニアは、力ある隣人たちがそっとしておいてくれるという幸せを持ち合わせませんでした (...) トルコ支配は一部の人々から信仰を奪い、しかしすべての人々から自由を奪った。だが異教の信者となった者たちも、結局ボスニア人として残っただけでした。占領者たちとは交わらず、習慣も生活様式も、言語も、故郷に対する愛も同じなのに、同胞たちと同じであったかつての自分たちではない奇妙な種族なのです。そうして自分たちだけ孤独になりました。ボスニアのイスラーム教徒ほど、歴史の中で孤独になった民族集団はいないでしょう (...)。<sup>21</sup>

三谷先生はこのインタビューの内容が『修道師と死』において語られるボスニア像に酷似し

<sup>20</sup> 三谷恵子「Bila jednom jedna zemlja...—旧ユーゴ各地のメディア、言語、そしてアイデンティティー」沼野充義編『ポスト共産主義時代のクロノトポス』(サントリー文化財団助成「ポスト共産主義時代のロシア東欧文化研究会」成果論集)、2005年、55-73頁。

<sup>21</sup> メシャ・セリモヴィッチ (三谷恵子訳)『修道師と死』松籟社、2013年、456頁。

ていることを指摘したあと、次のように続けられます。

ボスニアで生まれ育ち、そこで暮らしながらボスニアを描き、そしてボスニアを去ったメシヤ、その描くボスニアは、同じようにボスニアに生まれ、この地を文学的主题としながら常にその外にいたイヴォ・アンドリッチともまた異なっている。ボスニアはメシヤにとって、故郷でなければよかった故郷だったのか、ボスニア人とは民族であって民族でない民なのか。  
(...) 多様な因子を、しかし豊かな土地と文化とを内包したボスニアの姿を見ると、メシヤの人生はボスニアの一つの象徴であるかのようにも見えるのである。<sup>22</sup>

翻訳の刊行と同じ年に発表されたご論文「境界を描く―ボスニア出身作家たちのボスニア像―」<sup>23</sup>では、アンドリッチ、セリモヴィッチのほか、ジェヴァド・カラハサン、ミリエンコ・イェルゴヴィッチについても触れられ、「ボスニア」を一つの実体としてとらえるのではなく、さまざまに把握される対象として論じておられます。カラハサンはちょうど先日訃報が入りましたが、ボスニア戦争中はドイツ語圏に避難をしていた作家です。三谷先生が訳された短篇「一九九三年の手紙」は、イヴォ・アンドリッチの短篇「一九二〇年の手紙」<sup>24</sup>への応答としての作品です。アンドリッチは作中で、ボスニアを「憎悪の地」と描いており、ユーゴスラヴィア解体の流れのなかで、セルビア側からは戦争を正当化する口実に用いられ、ボスニア・ムスリムからはボスニアを貶めるものとして批判の対象となりました<sup>25</sup>。カラハサンは「一九九三年の手紙」について、「この作品はアンドリッチの短篇「一九二〇年の手紙」をめぐる愚かで醜い論争の結果として生まれました。文学に無知な人々は、ボスニアは憎悪の地であるという頭のおかしい理論の証拠として、アンドリッチのすばらしい物語を悪用しました。ボスニアは憎悪の地ではありません」<sup>26</sup>と述べています。三谷先生は二人の作家が描くボスニアのちがいを次のように指摘されています。

カラハサンはアンドリッチとは異なるボスニア——アンドリッチが描いた「差異とそれが生み出す憎悪」のボスニアではなく、「差異とそれが生み出す、憎悪すれすれの調和」のボスニアについて語る。(...) さまざまな形の愛情と信頼で結ばれた人々の対話を同心円状につなげ

---

<sup>22</sup> 同上、457 頁。

<sup>23</sup> 三谷恵子「境界を描く―ボスニア出身作家たちのボスニア像―」『ロシア・東欧研究』42 号、2013 年、17-31 頁。

<sup>24</sup> イヴォ・アンドリッチ（田中一生・山崎洋訳）『サラエボの鐘』恒文社、1997 年。

<sup>25</sup> アンドリッチをめぐる論争については、奥彩子「アイデンティティの相克：ボスニア・ムスリムによるアンドリッチ批判の系譜」『スラヴ学論集』22 号、2019 年、171-196 頁を参照のこと。

<sup>26</sup> “Egzil sarajevske književne zvijezde,” *Nacional*, br. 631, 2007.12.18. [<https://arhiva.nacional.hr/clanak/40955/egzil-sarajevske-knjizevne-zvijezde>] (2023.6.14 閲覧)



ながら、カラハサンは自らのボスニア像——憎悪と対立だけでなく、団結だけでもない、差異が微妙にバランスをとって人間関係を支えている多彩なボスニアを描き出す。<sup>27</sup>

アンドリッチが「1920 年の手紙」を発表したのは 1946 年、カラハサンは 1996 年、どちらも戦争終結の直後、「憎悪」がもたらす悲惨さを目の当たりにした直後でした。ですが、これから統一国家を作っていこうとする時代と、分断の深まりだけが感じられる時代とでは、作家が見出したいと思うものが異なるのは当然といえるようにも思われます。このように考えたとき、カラハサンの描く「憎悪すれすれの調和」は未来につなぐ儚い希望として浮かび上がります。もう一人、三谷先生が高く評価していた作家がミリェンコ・イェルゴヴィッチです。ボスニア生まれのクロアチア系作家は、ボスニア戦争が始まるとクロアチアに移住をして、現在も盛んに執筆活動を行っています。三谷先生はこの作家について折に触れて紹介をしておられ、その理由として、

長編であれ短編であれ、社会の表面で起きていること、歴史の記憶、そしてそこに暮らす人たちの内面を繋ぎながらボスニアの土壌を描くイェルゴヴィッチの語りの巧みさは、旧ユーゴ圏出身の現役作家では群を抜いている。<sup>28</sup>

と述べておられます。日常的な主題を多く描き、平易な文体が特徴の作家で、凝った難しい作品が多い旧ユーゴ圏では、読みやすい作家といえるでしょう。

このように三谷先生の訳業を全体として見てきましたが、第二のユーゴ時代の作品を主として訳しておられること、また、特定地域に偏らずに訳しておられること、ただそのなかでもボスニアへのご関心が深かったことがうかがえます。冒頭でお話ししましたように、東欧の特徴として挙げられている、「文化的多様性、多重性」、支配される地域であったこと、言語文化がローカル性を有していること、こうした特徴は、東欧のなかでもとくにユーゴスラヴィア、ユーゴスラヴィアのなかでもとくにボスニア・ヘルツェゴヴィナにおいて、もっとも凄惨なかたちで表出することになりました。三谷先生がボスニア文学に取り組みされたのは、まさにその故ではないか、ドラクリッチのときに記された「ALIZAŠTO?」の探究だったのではないかと思います。

## 司会

奥先生どうもありがとうございました。次に亀田先生の方からコメントいただきたいと思い

<sup>27</sup> 三谷恵子「解説」中東現代文学研究会編『中東現代文学選 2012』2013 年、40-41 頁。

<sup>28</sup> 三谷恵子「解説」中東現代文学研究会編『中東現代文学選 2016』2017 年、187 頁。

ます。

応答 亀田真澄「専門的でありながら、専門を超えるということ」

私にとって三谷先生は、長いあいだ、遠く仰ぎ見る存在でした。学部生のとき、本郷の総合図書館で三谷先生が独力で編纂されたという『ソルブ語辞典』をパラパラとめくってみては、その作業を想像して気が遠くなった時のことが去来します。当時の私にとって三谷先生は、図書館でお名前を見かけるという、ある意味では実在感のない存在でした。私と同じく東京大学文学部スラヴ語スラヴ文学研究室のご出身であるということは存じておりましたが、私の東大在学中、三谷先生は京都大学で教鞭をとられていたこともあり、また私自身が修士課程まではスラヴ語圏では基本的にロシアのこのことのみを扱っていたせいも、お会いする機会もなく過ぎていました。

ただし、博士課程に入ってクロアチアに留学をするとなったとき、まずお世話になったのが三谷先生の『クロアチア語ハンドブック』(大学書林、1997年)でした。三谷先生はザグレブ大学大学院人文社会科学研究科への留学されていた大先輩ということから、勝手な親近感を覚えもしましたが、お会いする機会はほとんどないままでした。

その関係が大きく動いたのが、私の博士論文の審査に三谷先生にも入っていただくことになったと、指導教員の沼野充義先生から伺ったときです。私の博士論文は、ソ連とユーゴスラヴィアのプロパガンダ表象を比較するというもので、分野としてはありえるものの私にとっては意外であり、「あの三谷先生が」と、快い興奮と緊張が走ったことを覚えております。このときには、三谷先生のお人柄を存じあげず、緻密な研究スタイルから、正直なところ、なんだか厳しそう、少し怖い人なのではないか、とも感じておりました。そして、私が博士課程を満期退学し、私自身は特別研究員として駒場に移った翌年、博士論文を実際に提出したときには、ちょうど三谷先生は東大に移籍されていました。沼野先生はこのとき、外部の先生として審査に加わっていただくつもりが、内部の先生になっちゃった、と偶然のようにおっしゃっていましたが、三谷先生を東京大学に呼んだのが沼野先生ご本人であったと知るのは、その何年も後のことになります。

その直後に私は東京大学文学部現代文芸論研究室の助教に着任したので、スラヴ語スラヴ文学研究室とはお隣、三谷先生の研究室とははす向かいのところで仕事をするという、三谷先生との急接近期を迎えることとなりました。この頃には学会などでご一緒する機会も増えましたし、現代文芸論研究室の紀要に執筆いただくなど、「あの三谷先生」とお仕事の面でご一緒できることはもちろん光栄でしたが、いま振り返ってみると、文学部3号館8階のスラヴ語スラヴ文学研究室の窓から花火大会を見ながらビールを飲み、とりとめのない話を一緒にしたときの笑顔がなにより印象に残っております。

私はアメリカとソ連を中心とする欧米のメディア表象について、主に感情論の方法を用いて

調べています。とくに私が研究対象としている集合的な共感という概念は、目の前にいるだけかに向けられた感情ではなく、メディアによって伝えられ、不特定多数の人々によって共有される、マスレベルの感情としての共感です。国家宣伝によって生み出された「共感の共同体」が、他者の排除へと人々を駆り立てるということは、残念ながら、いまのウクライナ侵攻を巡ってもそうですし、世界各地で起こっています。

三谷先生は旧ユーゴスラヴィア地域を通時的・共時的、そして領域横断的に研究されるなかで、この地域に特徴的な、絶え間ない政治的接触、周囲の勢力の思惑によってくりかえされる災厄、その結果として起こる、別の文化への合流、といったことからなる歴史的ダイナミズムを解き明かすということが、三谷先生のご研究の軸だったのではないかと思います。だからこそ、自分とは全く異なる環境に生きる人々の生活、そして感情を想像し続けられたのであり、それと同時に、その想像の限界を感じておられたのだと思います。ここではとくに二人の作家、スラヴェンカ・ドラクリッチとミロラド・パヴィッチに関して、三谷先生が論じられたことを中心に、お話しさせていただきたく存じます。

三谷先生は、スラヴェンカ・ドラクリッチ『バルカン・エクスプレス』の翻訳を、ユーゴ紛争のまだ続いていた 1995 年に刊行されました。『バルカン・エクスプレス』は、ユーゴ紛争下に生きる人々の毎日の様子を、その内部に生きるジャーナリストとしてドラクリッチが見聞きした様々なエピソードを通して伝えた作品です。三谷先生によるあとがき「バルカン・エクスプレス臨時増発便」は、いつもクールな筆致の三谷先生には珍しく、戦時中の混沌の熱気を感じさせるものです。三谷先生はユーゴ紛争の原因について、次のように書かれています。「宗教や民族の壁を既成事実として作り上げるために、一般の人々の心の中に他民族の恐怖と憎しみを植え付けるために、数々の蛮行は行われたのだ」<sup>29</sup>。しかしその直後に、こうも書かれています。「結局のところ、私自身何も理解できていない。私なんかには一体何がわかるというのだろうか？」<sup>30</sup>。ここには、ご自身が長年研究してこられた地域で戦争が勃発したにもかかわらず、自分はあくまで当事者ではなく、傍観者にすぎない、ある意味では高みの見物でしかないという、強い自製の念があらわれています。自分を律することが、研究者の姿勢であるべきだという、三谷先生の矜持を感じずにはいられません。その場の集合的共感に流されることなく、また共感をあおって人々を巻きこむというようなことは決してしないという立場こそが研究者であるということ、身をもって示してくださっていました。

また、三谷先生はミロラド・パヴィッチの『帝都最後の恋』と短編集『十六の夢の物語』の翻訳を手掛けられました。文学史家でもあったパヴィッチの作風は、一見時空を自在に超えているようでいて、同時に、アーカイヴ資料の片隅に残された記録を辿るような、非常にローカ

<sup>29</sup> スラヴェンカ・ドラクリッチ（三谷恵子訳）『バルカン・エクスプレス』三省堂、1995 年、242 頁。

<sup>30</sup> 同上。

ルな歴史に基づいていることが魅力です。パヴィッチの作品を紹介するうえで、三谷先生は、それが原初年代記や中世スラヴの聖人伝などのモチーフをどのように使っているか、古文獻やスラヴ写本、中世文獻から、どのようなことが引用されているかといったことにまで言及されていました。これは、三谷先生の緻密かつ幅の広い研究の蓄積があつてはじめて可能になることです。三谷先生の言語学のご研究は、私などにはときに専門的すぎるようにも見えるものですが、それと同時に、スラヴ言語文化に対する深く学際的な好奇心をお持ちだったからこそ、三谷先生はパヴィッチの最も良き理解者となりえたのでしょう。三谷先生がすぐれた入門書を多数上梓されていたことに加え、セルビア、クロアチア、ボスニア作家による作品の翻訳を、書籍の形で刊行する以外に、ご自身が運営されていたウェブサイトで一般に公開されていたことにも、三谷先生の、専門性の内部には閉じこもらない一面がよくあらわれているように思います。

『バルカン・エクスプレス』に戻りますと、あとがきの最後に、三谷先生は次のように記されています。「バルカン・エクスプレスの乗客は旧ユーゴに住む人達だけではない。私たち地球に住むものは皆、同じ列車の乗客。誰も途中下車できないし、車両を切り離すこともできはしない」。ここには、私の好きな思想家で建築家でもあったバックミンスター・フラーによる「宇宙船地球号」の概念を見ることもできます。フラーは「宇宙船地球号」という概念を提唱する上で、専門分化された知のありかたでは世界の長期的課題を解決できないと論じました。三谷先生の、学問分野や対象とする時代を超えて、歴史のダイナミズムの諸要素を解きほぐしていく研究スタイルは、集合的共感を喚起する表象が瞬時に世界中で共有され、強力な誘発力を持つようになった現代社会において、そしてアイデンティティ政治の影響で思想の分断が激しくなる一方の現代社会において、まさに社会から求められている知のあり方であると言えるでしょう。三谷先生の専門的なご研究を目の当たりにすると気後れをすることも多いですが、同時に、学問分野を超えていくことも人文学の知のあり方であると、今も、モラル・サポートをいただいていると感じております。高度に専門的でありながら、専門性ということ自体を問い、柔軟に超えていくことこそが人文学の知であるという三谷先生から学ばせていただいたことを、これからも研究を続けていく上での信念としていきたいと思います。

司会

亀田先生どうもありがとうございました。

質疑

司会

私は2016年に東大に着任し、三谷先生が精神的な支柱でいてくださったので、二人三脚とい

うよりは、頭脳の三谷先生の元で私が動いたり走ったりする感じでした。病気をされてからそのバランスがちょっとずつ失われましたが、それでもやはり圧倒的な判断の瞬発力で、あらゆる物事に対してとても的確に判断され、本当に驚異的でしたし、大変頼もしかったです。

東大の文学部に新任が自分の研究を紹介する学部内研究報告会があるのですが、三谷先生も着任された2014年に担当されていて、「ウクライナーボスニア 国が消えて国境が残る物語」という論文にまとめていらっしゃいます。ウクライナ出身の人が第一次世界大戦から革命期において様々な困難を避けて一旦ボスニアに移住するものの、再び戦火にあってアメリカへと流れていった状況を取り上げているものです。アメリカで書かれた小説と、実際の事例を比較して分析されていて、人間というものはどこかで区切られたり固定されたりするものではないし、それでも居たいと思う場所に居られない、そういう悲劇というのが20世紀の間、繰り返されているのではないかと、ということを、潜在的には2014年のクリミア半島のロシアへの一方的な併合という時代を背景として、報告されています。

ではご質問ある方がいらっしゃいますか。

## 質問1

今日はこのような場を設けていただきありがとうございます。2018年に東京大学を卒業し、その後、社会に出て、現在は会社勤めをしている\*\*と申します。その当時、文学部所属だったので、ぜひとも文学という視点から、私たちが今、社会に出て学問ではなく文学に関わっている立場にも何ができるのかっていうことをずっと考えていました。特に先ほどもお話があったようなクリミア併合であったり、2022年以降のウクライナ侵攻といった状況に対して、学問、特に私の場合は文学が身近だったので、文学のお二人にお聞きしたいんですが、文学によって、例えば想像力を広げるであったりとか、先ほど亀田先生がまさにおっしゃっていたように、人文学に求められている柔軟な知のあり方とは、まさに、研究者だけでなく人間としても力になる姿勢だと思っています。そういった背景の中で、ぜひ学問には、現実に向き合うためにどんな力があるとお考えか、学問をやっている皆さんが出した結果に対して、私たち民間のものがどういう風に接していったらいいかを、現代の背景を踏まえてお聞きできたらと思います。

## 亀田

すごくタイムリーなホットなご質問をいただきまして、どうもありがとうございました。私が思うのは、文学、表象文化一般にできるということは、想像する力を補うということかなというふうに思います。というのは、想像してくださいっていう言葉は、よく使われると思うんですね。想像してください、今ここでこんなことが起きています。想像しましょう、というふ

うに言うんですが、意外と想像したら、例えば私は実際に言われたことが、あなたの故郷がなくなるのを想像してくださいって言われて結構すっきりするかもって思っちゃったんですね、私は。でも、多分想像してくださいと言った人が言いたかったことはそのことではないし、想像力を補うということがそういう意味でも必要になってくるだろうし、一般の人が、例えばホロコーストだから地獄だっていうものに対して、そうではないんじゃないかっていうふうに言ったのが、『運命ではなく』というハンガリーの作品でしたけれども、収容所にも幸せはあったというような言葉を彼は言いました。想像力は放っておくと一つのものになってしまう、そこに対して様々な現実があるんだってということ、そうやって想像力を豊富にしてくれるっていうものが文学なり表象文化なのではないかなというふうには私は思っています。

## 奥

ユーゴスラヴィアは、ウクライナとの類似点について、やはり質問を受けることがあります。根本においてユーゴスラヴィアの件とウクライナの件は違うということを大前提としながら、なおかつユーゴスラヴィアは95年に一応戦争が終わって、もうすぐ30年になるわけですが、その後の時代を見ているものとしては、やはりその時に戦った人たちが今どういう状況にあるかとか、その時ナショナリズムで国にいて憎悪を煽った人たちはどうなったかとかっていうことを考えると、簡単に人文学は何かをできるっていうふうには、悲観的な意見ですが、なかなか言えないところがあるように思います。なので、その知識を持つ人間が煽るっていう状況も見てきているわけですので、やはり常に一個人としてできるのは、人を裁かないっていうことだというふうには自分では思っています。いろんなものを読んで、とにかくいろいろ相対的に考えるという営みが、大学にいる者だけではなくて、ぜひ人間一人一人がどこかの立場の一つに入れ込むのではなくて、常に物事を相対化しながらでも考え続ける、和解はできないというのではなく、ウクライナのことについて言ってるわけじゃないんですけど、ユーゴスラヴィアで、やはり和解って難しいわけですが、できないと決めつけて諦めるのではなく、少しずつ少しずつ時間をかけて、とにかく考え続けるしかないということを、ユーゴスラヴィアのその後を見ていて感じます。あまりポジティブなお返事じゃなくて申し訳ないですが、質問してくださるということが、すでに考えるということを実践してくださっていると思います。

## 司会

ありがとうございます。最後間近で一緒にお仕事させていただいて、すごく感じたのは、三谷先生の研究は、例えば時代的にも古かったりとか、日本の研究テーマとしても社会的な情報としても非常にマイナーであったりとか、そういう意味で言うと、直接的に何か社会を変えようとか、発言しようとかではなくて、現実の社会と非常に距離がある研究のように見えますが、

ある種の何かしら一石を投じたものが回り回って、世の中が変わっていくということに関して、すごく信念を持ってらしたように思います。それはすごく身近な、自分たちが所属する研究室の改革をするとか、学会の改革をガンガン進めていくとか、そういうところにも表れているというふうに思っ、くじけず諦めないで自分の研究を信じて邁進するっていうことはすごく学びました。

次に全体の討論に移っていきたいと思います。どなたかご意見ないでしょうか。

## 質問2

東京大学などで非常勤をやっている\*\*と申します。個人的なエピソードとしては学部から修士にかけて三谷先生の授業をまさに3号館の一番上の方で受けておりまして、すごくお世話になりました。所属は駒場でしたが、本当にお世話になり、大変啓蒙を受け、とても貴重な機会をいただきました。今ユーゴスラヴィアの話が中心だったと思いますが、文献学や、社会言語学全体として、今やはりウクライナの言語状況は、非常にまた複雑な状況になると思いますが、三谷先生のご研究なども含めて全体的に、どちらかというと南の方だと思いますけども、これからロシア、ウクライナ、東スラヴの状況を研究するにあたって何か我々の世代が生かしていけることがあるのかなと、ご意見をどなたでもいただければと思います。よろしく願います。

## 司会

ありがとうございます。そしたら、こちらの方は堀口先生、菅井先生、恩田先生いかがでしょう。

## 堀口

私もいろいろ自問自答していて、答えも見つかっていないような状況ですが、言語研究は、政治を考慮せずに、例えば文法とか、語彙とか、しようと思えばできますが、例えば社会的なことを背景に入れると、政治のことも考慮に入れないといけないのかなとは思っています。

## 菅井

ちょっと難しい質問だなと思って戸惑っていたのですが、私は社会言語学を最近やっている中で、ウクライナではないですけども、やっぱり確かに語彙とか文法に関してやるのであれば、なかなかそこまで関わってこないかもしれませんが、社会言語学はもろにそれこそ方言とか、方言と言語は何だとかという話の中で、南スラヴの世界というのは、結構ユーゴスラヴィアもそうでしょうし、ブルガリア、マケドニアというのも常に言語なのか方言なのかとか、アイ

デンティティの問題も関わってきて非常に難しい問題をはらんでいるんじゃないかなと思います。そうですね、すぐに答えはないんですが……。恩田さん、いかがでしょうか。

恩田

もうちょっと時間がかかるかなと思ったんですけど……。そうですね、僕の専門は古代教会スラヴ語ということで、少し無理やりですが、古代教会スラヴ語は今、簡単に言うと人気がないんですね。あんまり勉強する学生がいない、開講される大学が少ない、というような状況です。今回、ウクライナを巡っていろいろな社会情勢が混乱してきた時に、古代教会スラヴ語を勉強するというのが、もう1回意味を持ってきたのかなと思っています。古代教会スラヴ語の勉強は、先ほど僕の報告の中にもあったように、ただひたすらテキストと向き合って細かくテキストを読んでいくっていうだけでは決してなくて、服部先生も数年前に本（『古代スラヴ語の世界史』白水社、2020年）を書かれましたけれども、古代教会スラヴ語の学習を通してスラヴの歴史、スラヴの書記文化の歴史というものを認識していくという基礎修養としての意味があります。ロシア、東スラヴ（すなわち）ルーシに話を限定してしまえば、古い時代のロシアの文学作品、文献というものはキエフルーシで成立したものが多く。「イーゴリ軍記」や「原初年代記」なんかもキエフで書かれた、キエフルーシの時代のものだと言われています。これ（древнерусский）を単純に「古代ロシア文学」と呼んでいいのかどうか、русский という単語を単純に「ロシア」と翻訳することが、今この時代に果たして適切なのかどうかということを考える、ひとつのきっかけにはなってくるかなと思います。ルーシという概念と、それに直結している今のロシア・ウクライナ・ベラルーシ（の関係）を考えるきっかけとしても、こういう古典、文献学は意味を持っているのではないかと、結局自分の宣伝みたいになりましたけれども、そんなことを思っています。

司会

ありがとうございます。三谷先生がよくおっしゃっていたことがふたつありました。ひとつは、「私はロシア語の専門家ではないから」という謎なことをおっしゃられていて、私にはとてもそうは思えないのですが……。三谷先生はとても美しいロシア語を話されました。以前中国から来た同僚があまりにも素晴らしい日本語を喋っていて、なんでこんなに綺麗に聞こえるんだろうと思った時に、個々の発音よりも呼吸の方法がそのネイティブに近いときれいに聞こえると思ったことがあります。本当に流暢に話すというのは、ペラペラしゃべるという意味ではなくて、呼吸なんですね。三谷先生のロシア語もネイティブと同じ呼吸をして言葉を話されるというのがとても印象的でした。もうひとつ言われたのは、中世の聖者伝を始めとして、古い文献を読んでいると人間の生はそこに全て書かれている、それ以降の文学はそれ以上に



があるのって言われて、すみませんっていう感じだったんですが.....。

私たち外国にいる、つまりネイティブではない人間がその地域の言語や文化を研究する意味というのが、今だからこそすごく問われていると思います。ネイティブだと文化の所有権の争いになったりしますが、私たちがロシア語話者であったりとか、セルビア語話者、クロアチア語話者、ブルガリア語話者という形で参画をしていくことで、言語をその国家の独占事業から奪還する契機になりうるのではないかと。私は最近端的に「ロシア語をロシアから奪還する」と言ってるんですけど、ネイティブとは違う角度から切り込んでいける。まさに三谷先生が極めてニュートラルに研究に向き合っていたらっしゃったというのは、そういう意味もあるのではと思っています。

## 木村

私たちは学問上ニュートラルだということは言えるかもしれませんが、日本に居るという立ち位置をどう考えるか、ということはあると思います。スラヴの言語や文化や文学を研究するに際して、私たちが日本に居ることがどういう意味を持つのか、ということについて登壇者のみなさんはどのようにお考えでしょうか。

例えば研究上の視点であるとか、あるいはアウトプットの意味あるいは社会に対して学問に対して、どういうふうに関与しない要素として日本という場が作用しているのか、関心があります。三谷先生にひきつけますと、例えば一般向けの論文としてこの『思想』に書かれた「境界」と「媒体」:言語から見た中欧(岩波書店、2012年)では日本の読者を意識して書いている印象があります。かっちりとした研究論文ではないのですが、言語の研究自体もそういった日本のことを意識していると感じたので、そういう姿勢と言いますか、どういうふうに関与していくのか。ひとりひとりその意識は違うと思いますし、一般化できることではないと思いますが、何かお考えのことがあればお聞かせいただければと思います。

## 堀口

私の場合ですと、ロシア語とラトビア語を研究しています。言語学です。自分の母語じゃない言語を研究対象にすると、一見するとハンデかとは思いますが、でも母語ではないからこそ見えてくるものはあると思います。大学院生の時は、例えば学会に行って、母語話者の前で、ラトビア語のことをラトビア人の前で、ラトビア語で話すのは、かなり怖かったです。母語じゃない言語を研究する、しかも、それを母語の人たちの前で発表するのが、かなりコンプレックスでした。でも、何回か重ねていくうちに、その母語じゃない人たちが見えてないようなものが、見えるのではないかなと思えるようになりました。

## 菅井

私の場合は、ブルガリアというのが私の中心的な領域ですが、フィールドに出かけて、そこで調査をすることがあるのですが、ブルガリアのナショナリズム的な考え方が、その言語の見方に対しても結構反映されているような部分が、残念ながら、あると思います。例えば、方言学のレベルにおいても、マケドニアとの問題もあります。それから、私は、フィールドで出た時に感じたのは、実際にその調査をした学校の子どもたちと言語の維持に関することで、いろいろインタビューを取ったりとか直接話したりして、それをもとに国際学会で発表したんです。その時に、実際には言語の維持している能力、活力というものは、そこまで高くない、といういふ僕なりの分析をして結論付けてたのですが、モルドバとかウクライナで、ブルガリア語を教えたりしているブルガリア学者の先生から、ケチがついたというか、いやいや子供たちはみんな本当にブルガリア語ができるよ、と。例えば、何とかの作文、何とかの詩なんかこんなに綺麗に発音できる、こんなのも覚えてる、と。私が実際に調査した時には、確かにそのコンクールに出るために覚えたところの詩を完璧に綺麗なブルガリア語で話して披露してくれました。でもそれ以外の時は全部ロシア語で話していた。で、ちょっと突っ込んで聞ける子たちだったので聞いてみたら、事実上ロシア語しか普通は話せないし、ブルガリア語はそうやって覚えてるけど、でも実際の運用において使ってないと。だけでも僕がそのことを言っても、「いやいや私は直接見た、あんなにコンクールで素晴らしいブルガリア語を話していたんだから、そんなことはない」という議論になったことが一回ありました。やはり、いい方で見てしまいます。日本人の客観的な視点からあえて見直すということはできるのではと考えています。

## 恩田

日本人として古代教会スラヴ語をなぜ勉強するのかというのは常に考えています。ロシア人に自己紹介する時に古代教会スラヴ語 *Старославянский* を勉強していますというと、反応のパターンは大体二つで、*Зачем?* (何のために?) と *Почему?* (どうして?) なんです。今パッと思いつくのが、2つ意味があるかなと思っています。ひとつは三谷先生の言葉です。以前、研究会か何かの後に神保町で学生たちとお酒を飲んでいて時に、お酒も入って僕もこういう性格なので、ちょっと軽口が出まして「大学院で古代教会スラヴを勉強したい、なんていうのは、俺はこれからロックで飯を食ってくんだ」というのと同じ意味だ、ということを言いました。もちろん冗談のつもりだったのですが、その時に三谷先生が冷静に「でも誰かがやらなくちゃね」っていうことをおっしゃっていた。三谷先生は学会をすごく大事にされていて、(個人の) 点としての研究ではなくて日本地域、もしかするとアジアまで視野に入れてたかもしれませんが、アジア地域でスラヴというものを研究するといった時に、学会としてこれをやる(研究する) 人がいる、あれをやる人がいる、という役割分担みたいなことを考えていたのではな

いかなと思います。誰かがやらなくちゃね、という言葉を経験論的に「お前がやれ」と解釈するべきか、意味論的に、文字通りの意味で解釈するべきか悩みましたけれども、今日、名前が出ました木村彰一先生から始まって佐藤純一先生や千野栄一先生たちが引き継いでいった古代教会スラヴ語を三谷先生であつたり岩井憲幸先生たちであつたりが、広げていった。その伝統を何らかの形でやっぱり引き継いでいかなければいけない、そういうプレッシャー、使命感みたいなものは日本人として持っています。

もうひとつは、具体的な話ですが、2016年に隣にいる菅井健太先生とアトスへ行った時に、ゾグラフ修道院で「古代教会スラヴ語を勉強してる」と言ったら、珍しがってくれて「じゃあ写本を見せてやろう」ということになり、アーカイブ（文書庫）に入れてもらえたということがありました。古い写本なんかを、突然見ることで感激しましたが、その中に宣教師ニコライに関連するものがいくつかありました。ギリシアのアトス山にある、ブルガリア系の修道院が日本語の書籍を集めている、そういうことを経験したときに、日本人として世界と結びついたかな（研究している意味があつたかな）というような気持ちになりました。以上です。

## 亀田

先ほどの楯岡先生もお話にも通じますが、三谷先生が古代の文献に現在起こっていることは全て出ているということはおっしゃっていたことと関係が深いと思うのですが、現在の国家という枠組みができる前の研究（古代教会スラヴ語や、スラヴ写本など）と、現代のような形の国家ができた後と、思想や考え方が違うのではないかと思います。現在、国家という枠組みにどっぷり浸かっている私にはなかなかわからないことですが、人類学者のピエール・クラストルが『国家に抗する社会』という本の中で、社会というのは基本的には国家的なものの形成を拒んできたのだと語っていますが、国家という存在自体を問う、実は国家という存在も脆弱なものじゃないかと考えることは、自国にいるとなかなか難しいです。だからといって、私がソ連やアメリカ、あるいはユーゴスラヴィアという国のことを客観的に見れているか、と言われると全くそんなことはないと思いますが、その枠組み自体を問うということは、その外側にいる人だからこそできると思っています。

## 奥

私自身がユーゴスラヴィアの文学を専門とする人間としては3人目だと言われて育ちましたが、1人目が田中和夫先生、2人目が山崎佳代子先生、20年おきに1人と言われていて、そろそろ、4人目の専業ユーゴスラヴィア文学を志す方に出てきていただかないと思います。もちろんそんなことを考えて始めたわけではなく、ユーゴスラヴィア紛争の時に、流れてくる言

葉がどうもニュースであつたりとか、あるいは歴史的な言葉であつたりとか、そういった中で、何か偏りがあるような気がして、私は文学を通してその地域のことを考えたいと思ったのがきっかけでした。なので、自分が非常にマイナーな言語で、正式にはどの大学でも学べない、外国語大学にも学科もないような言語なので、非常に難しいわけですが、京大のスラヴ専修の佐藤先生が最初に栗原先生をお呼びくださって、集中講義でセルビア・クロアチアを学んで、中島由美先生も来てくださいましたし、それで三谷先生も来てくださってという形で、すごく小さなコミュニティの中でも、非常に協力し合って、みんなで学んでこられた中で、それを社会に対して還元していくときに、三谷先生が文学作品を翻訳くださったのも、社会への還元の一つだったのではないかと、今回、文献学の話をいろいろ伺っている中で感じました。そのような形で、誰かが訳さないと読めない国のものをやっているっていうところで、訳すときに、バランスを考えると、か、どういったものが必要なのかを考えると、おそらく、自分の存在が主張してしまうところがあるんだろうと思います。もちろん、それは自分の主観で選ぶとかではなくて、やはり現地のありようですとか、そういったものを見ながら、三谷先生も本当にお話しになったものだけではなくて、いろんな文学作品を目に通されていたということが、御蔵書からも伺えまして、そういった意味で、いろいろ目にされている中で、これをということと選ばれていると思いますので、そういった何かつなぐ役割としての自分があるのではないかと思います。

## 司会

ありがとうございます。三谷先生が初めて翻訳された『バルカン・エクスプレス』を、現地での出版からほぼ間を置かずに出版されたということにも普段すごく冷静だけれども、必要となるとカッと熱くなれる、そのエネルギーも凄いと改めて思いました。

ではそろそろ時間になりましたので、今日のシンポジウムはこのあたりで終わりとさせていただきます。最後に閉会の辞で日本スラヴ学研究会の長興先生に一言いただきたいと思います。

## 閉会の辞

### 日本スラヴ学研究会会長 長興進

日本スラヴ学研究会の長興です。話が前後しますが、今、登壇していらっしゃる方々の質疑応答を聞いていて、今の若い世代は僕たちの頃より、知的に成熟している、という印象を受けました。我々の頃だと、なにか質問を出されると、即座に立て板に水みたいに答える傾向がありました。けれども今の皆さんは、質問自体がどれも重いし、ひとつの答えがあるわけでもないし、という中で、質問を真摯に受け止めて、一所懸命その場で考えて、自分の言葉を紡ぎ出

していくというか.....。これが本当の対話なんだと、僕にはそれがとても印象的でした。人間は時が経るなかで、それなりに思考も態度も成熟していくんじゃないか、という希望を持ちました。

話が前後してしまいましたが、今日のシンポジウムはどのお話も、三谷恵子さんに寄せる思いがこもっていて、厳粛な、でも同時に心の温まるような、そういう気持ちで聞いていました。蔵書の話から始まって、スラヴ言語学者としての、文献学者としての、さらには東欧文学の翻訳者・研究者としての三谷さんのお仕事と、彼女の存在の大きさと幅の広さを、改めて思い起こす機会になったと思います。

この場をお借りして、三谷さんについての僕の個人的な思い出を、ご披露したいと思います。

初めてお目にかかったのは、今から 35 年ほど前の 1980 年代後半のことです。その当時、神田神保町にある岩波書店の古い建物のなかで、『岩波ロシア語辞典』の改訂作業が行われていました。皆さんもきっとお使いになっているでしょうし、もちろん僕も今でも座右に置いているあの辞典です。僕はアルバイトの一人として、素読みと呼ばれる作業をしていました。すでにできているゲラに目を通して、コメントをつけたり、疑問が浮かんたら、調べて付箋をつける、という作業です。この作業に携わっていたのは、当時、若手からそろそろ中堅になりかけのロシア語研究者たち、金田一真澄さんとか芳之内雄二さん、それから今日動画で報告なさった服部文昭さんも、いらっしやったと記憶しています。三谷さんもそんなアルバイトのお一人でした。1980 年代の話ですから、彼女はまだ大学院に在籍しておられたと思います。アルバイトの中ではいちばん年若い方でした。いつも作業場（校閲室と呼ばれていたと思います）の、窓際の机に座って、静かに黙々と仕事をなさっていた姿が思い浮かびます。

ところがある時その彼女が、これからクロアチアの大学に行って、博士号を取ってきますと、さらりとおっしゃったんです。先ほどいただいた年表を拝見しますと、三谷さんは 1989 年 3 月に、ザグレブ大学哲学部で博士号を取得した、とあります。このことを本当にさりげなく、明日どこかに買い物に行ってきます、みたいな感じでおっしゃって、僕は本当にびっくりしました。当時はユーゴスラヴィアが解体される直前の時期だったと思います。「これは大変な才女だ」と思いました。才女という言葉は、ひょっとしたら今は、アウトとされる表現かもしれませんが、35 年前の話ですし、本当に驚嘆の気持ちを込めた本音でしたから、お許しいただきたいと思います。

それ以後折りに触れて、様々な機会に様々な場所でお目にかかりましたが、いつも爽やかというか、涼しげというか、そういう雰囲気을漂わせておられました。この印象は、最後にお目にかかったときまで、変わりませんでした。

僕にとっていちばん印象に残っているのは、日本スラヴ学研究会の執行部でご一緒したことです。今からちょうど 4 年前の 2019 年 6 月に、日本スラヴ学研究会の企画編集委員長に就任されて、僕はその時会長になったのですが、彼女は研究会の活動を中心になって統率され

ていました。今でも印象に残っているのは、2020 年秋に日本学術会議の会員任命問題が起きたとき（この問題は今でも続いています）、研究会としてどのような対応をすべきかについて、企画編集委員会で真剣な議論が交わされたことがあります。三谷さんは、日本スラヴ学研究会のような学術組織が、こうした「政治的行為」を行うことの意味を熟考されて、「踏み絵化」や「付和雷同」を避けつつ、委員会内部でのコンセンサス形成を重んじて、議論をまとめられました。学者として、研究者としてだけでなく、社会人、そして組織人としても、非常にバランスの取れた判断ができる方だ、ということに改めて感じて、敬服の念を新たにしました。

その彼女が、2022 年 1 月に急逝された折りのことにつきましては、『スラヴ学論集』2022 年（25 号）に掲載されています。25 号はピンク色の表紙で、これは三谷さんの追悼号なんですけれども、彼女はピンク色が好きだった、という情報を得て、この色にしたんです。本会場に置いてありますので、どうぞ手に取ってみてください。この号に僕も思い出を書きました。その他にもスラヴ言語学者としての、クロアチア研究者としての、東欧文学の翻訳者としての、そして友人と同僚としての三谷さんを偲ぶ、4 篇の弔辞が掲載されています。ご関心がおありの方は、後ほどお読みいただければと思います。

この『論集』が、そして本日開かれましたこのシンポジウムが、三谷さんのお仕事と研究を総括して、次の世代にしっかりと引き継がれていくきっかけになればと願って、閉会の挨拶としたいと思います。最後になりましたが、このシンポジウムを組織してくださった東京大学文学部スラヴ語スラヴ文学研究室の楯岡求美さん、日本ロシア文学会の中村唯史さんをはじめ皆さんに、厚く御礼を申し上げたいと思います。そして登壇して、とても有意義なお話を聞かせてくださった皆さんにも、改めてお礼の言葉を申し上げます。

最後に一言。皆さんもお考えになっていたかもしれませんが、僕も実は考えていたのですけれども、我々みなに与えられている時間は、等しく一日 24 時間です。そのうち、研究に費やすことができる時間が、どれほどあるのか。僕は 3 年前に定年退職して、それ以降は自分の時間を自由に使える、従って研究と仕事に専念できる、という、たいへんありがたい立場になって、それでも 1 日 10 時間仕事をしたら、今日はよくやったな、という感じです。与えられている時間はみな平等です。

その中で三谷さんは、出版される関係文献はすべてフォローなさって、その他のスラヴ文学もフォローなさって、それから中世の聖者伝とにらめっこをされていた。さらに文学の翻訳というのは、ちょっとやったらできる、というものではないと思うんですが、この 3 つの仕事に取り組みれて、どれも実に見事な成果を上げておられる。これは三谷さんご自身にお聞きするほかないことかもしれませんが、どうやったらそれだけのお仕事ができるんですか、と聞いておけばよかったと思っています。きっと彼女だったら、「大したことないわよ、面白いからやっているんです」と、さらりとお答えになったかもしれないですね。本当に天才的な方だったと思います。その彼女と、人生の一時期に多少でもお付き合いする機会があったことを、

僕はたいへん幸運に思いますし、またその彼女と、もっといろいろお話する機会が失われてしまったことを、たいへん心残りに思います。余分なことを喋ったかもしれません。あらためてご冥福をお祈りいたします。

## 司会

長與先生ありがとうございました。

本日は会場参加の方、Zoom 参加の方、ともに長時間にわたってご参加・ご視聴いただきありがとうございました。またこの難しい課題を引き受けてくださった今日の報告者の先生方に深く感謝申し上げます。では今日はこれで終わりとさせていただきます。ご参加いただき本当にありがとうございました。